

606
176



0057702000

0057702-000

606-176

極東戦争と米国海軍

平田晋策・著

天人社

昭和5

AJG

6. 3.10

極東戰爭

と
米
國
海
軍



平田晋策著



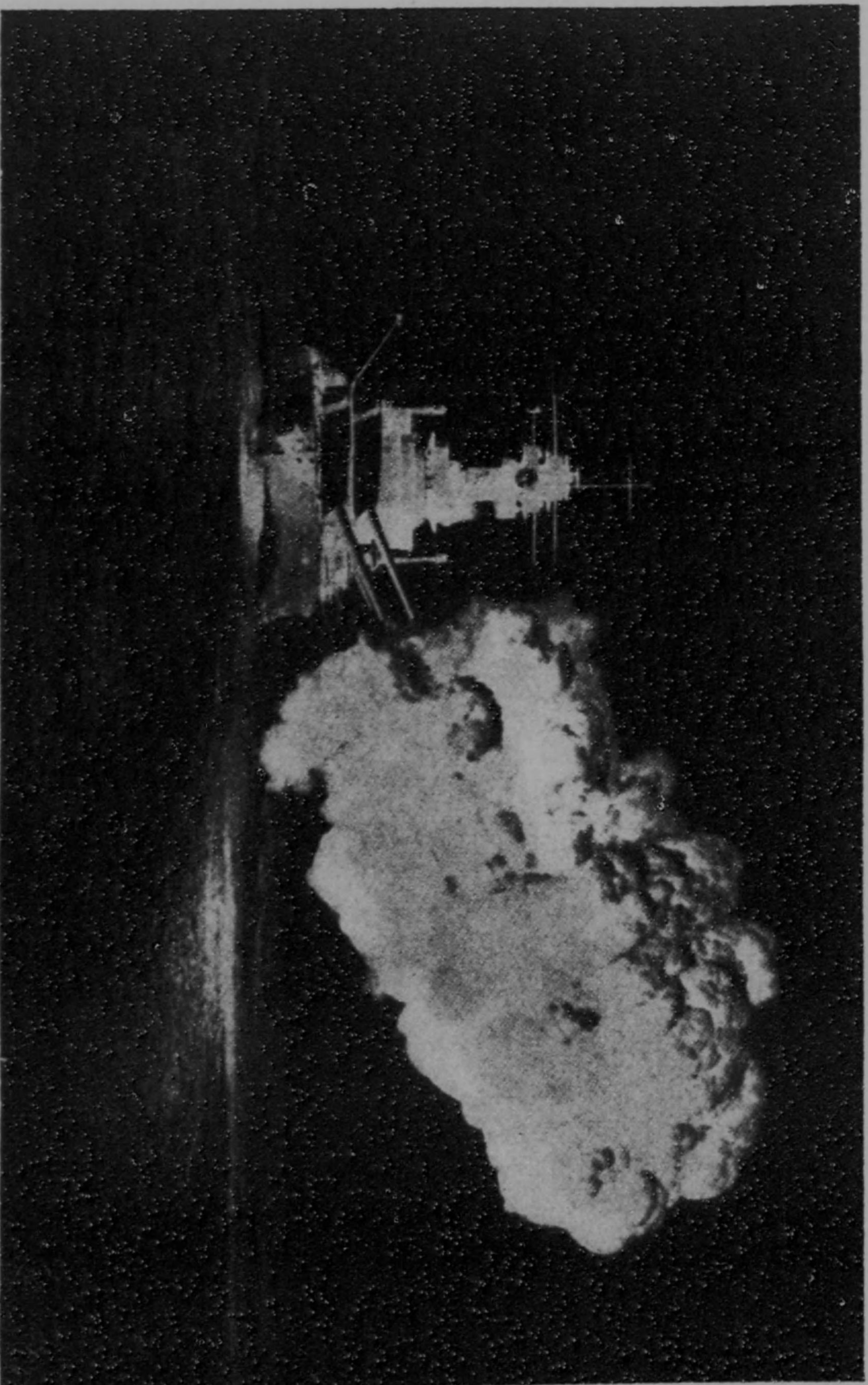
平田晋策著



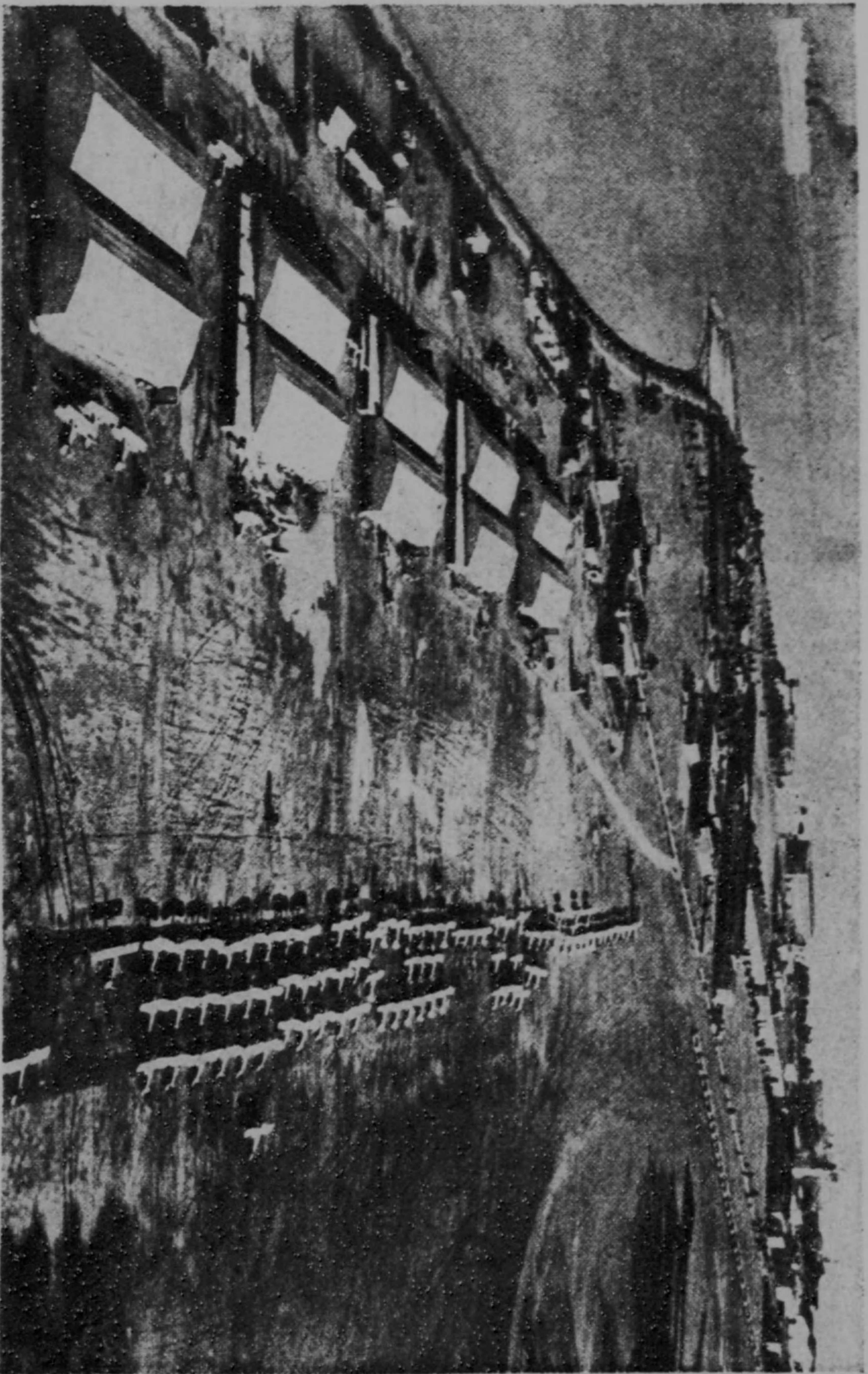
と米國海軍

天人社刊

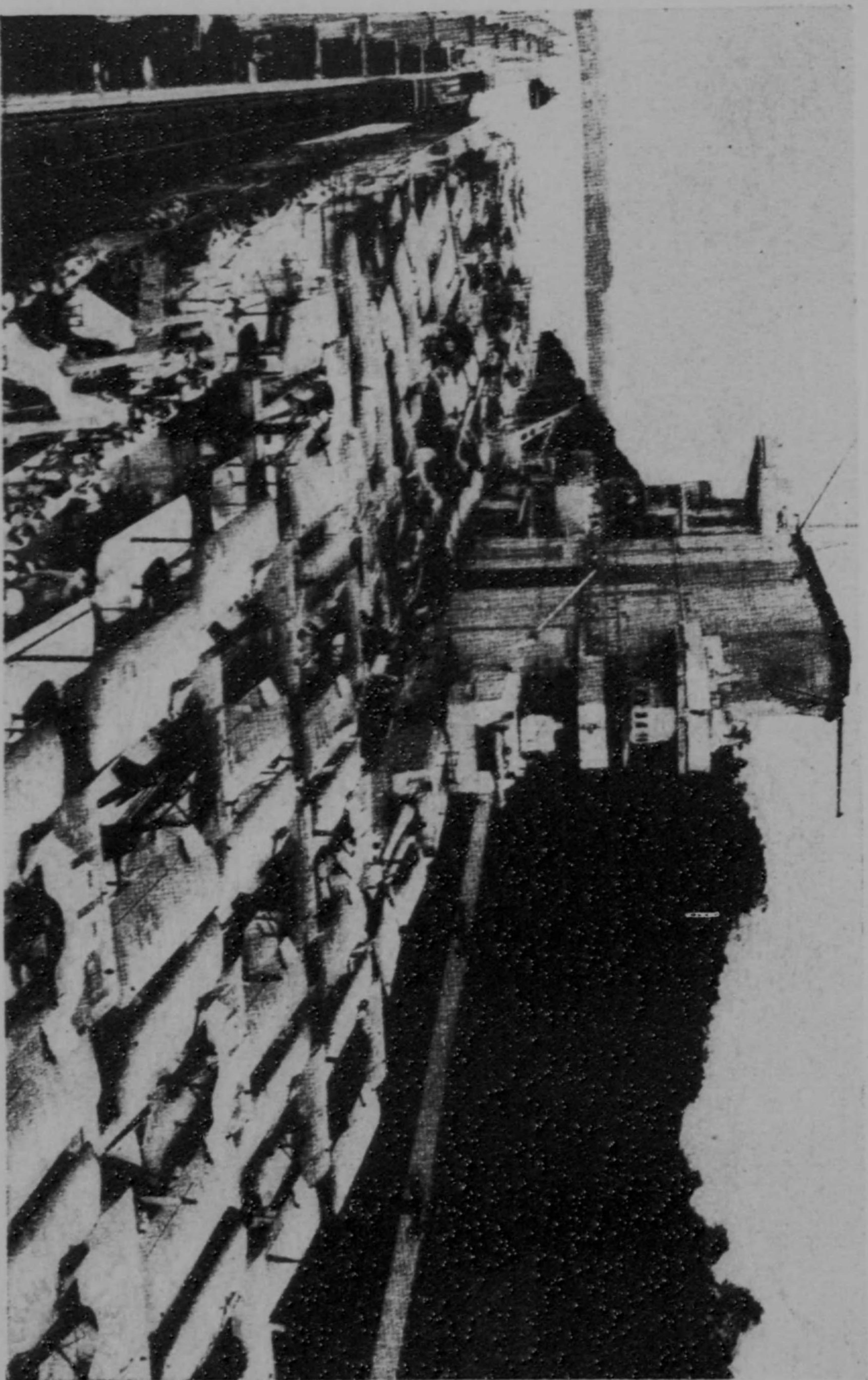




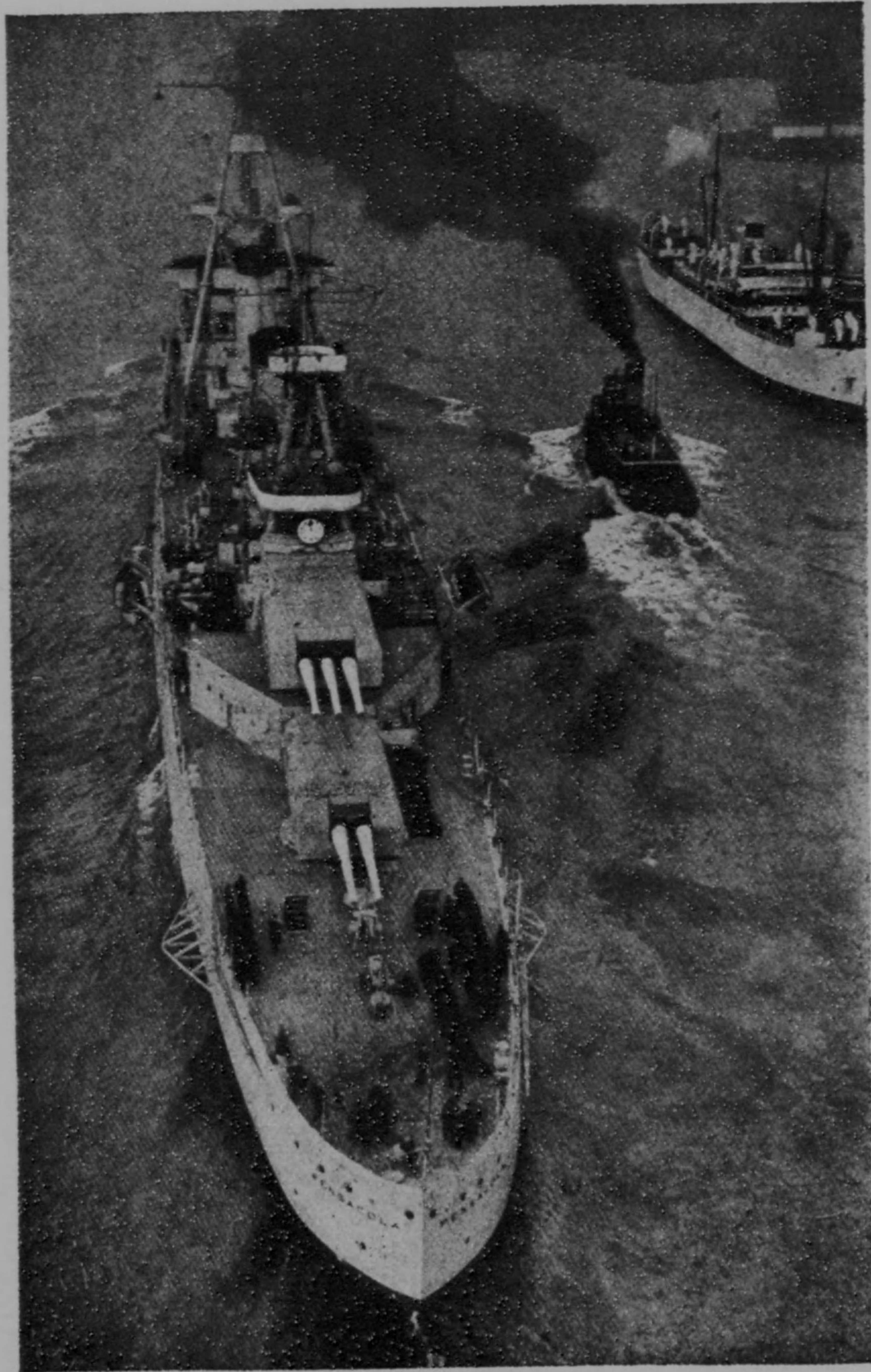
米 國 艦 隊 「ペンナクム」の砲發射



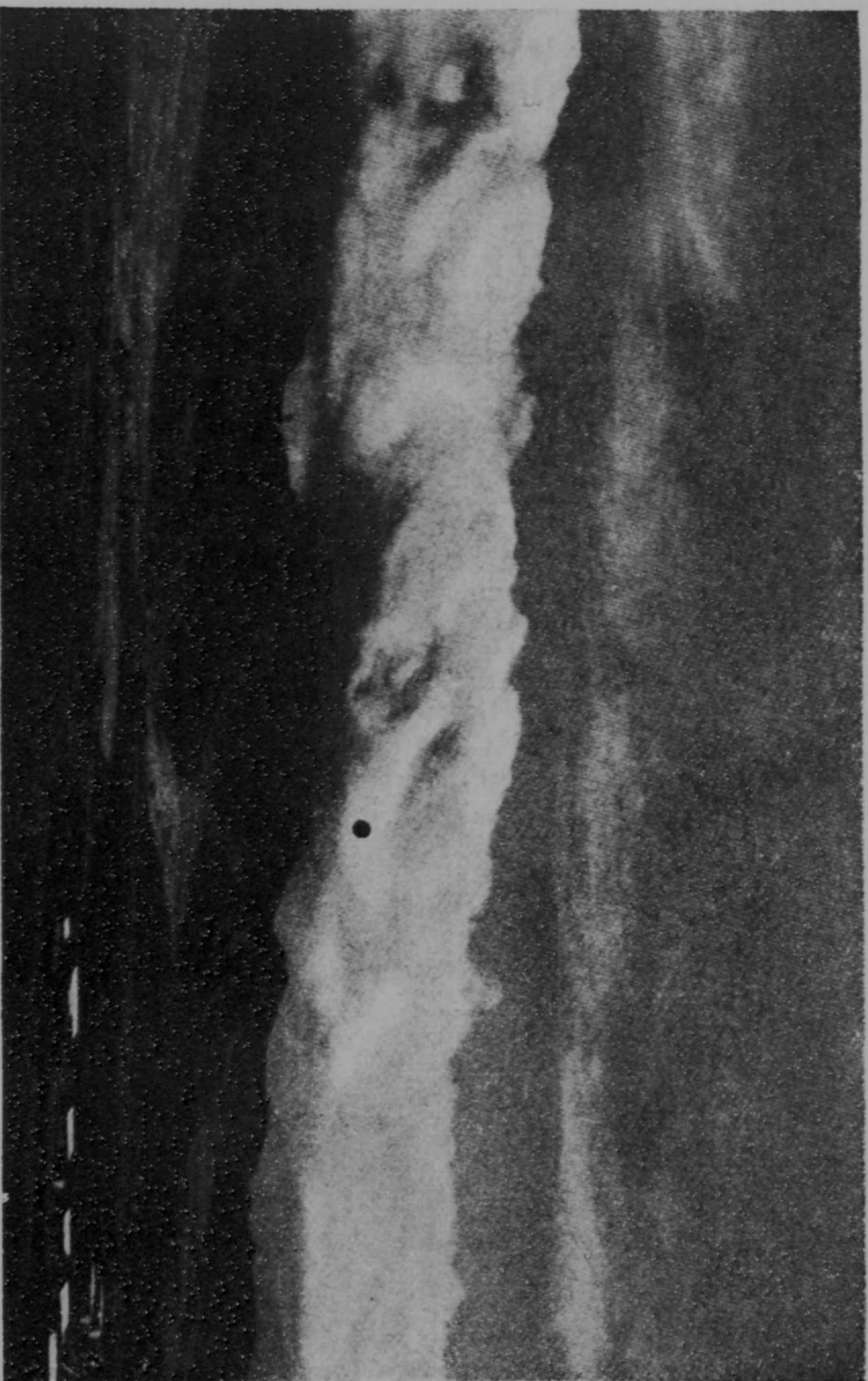
地盤銀行飛の港軍ゴエイデ・ンサ岸洋平太



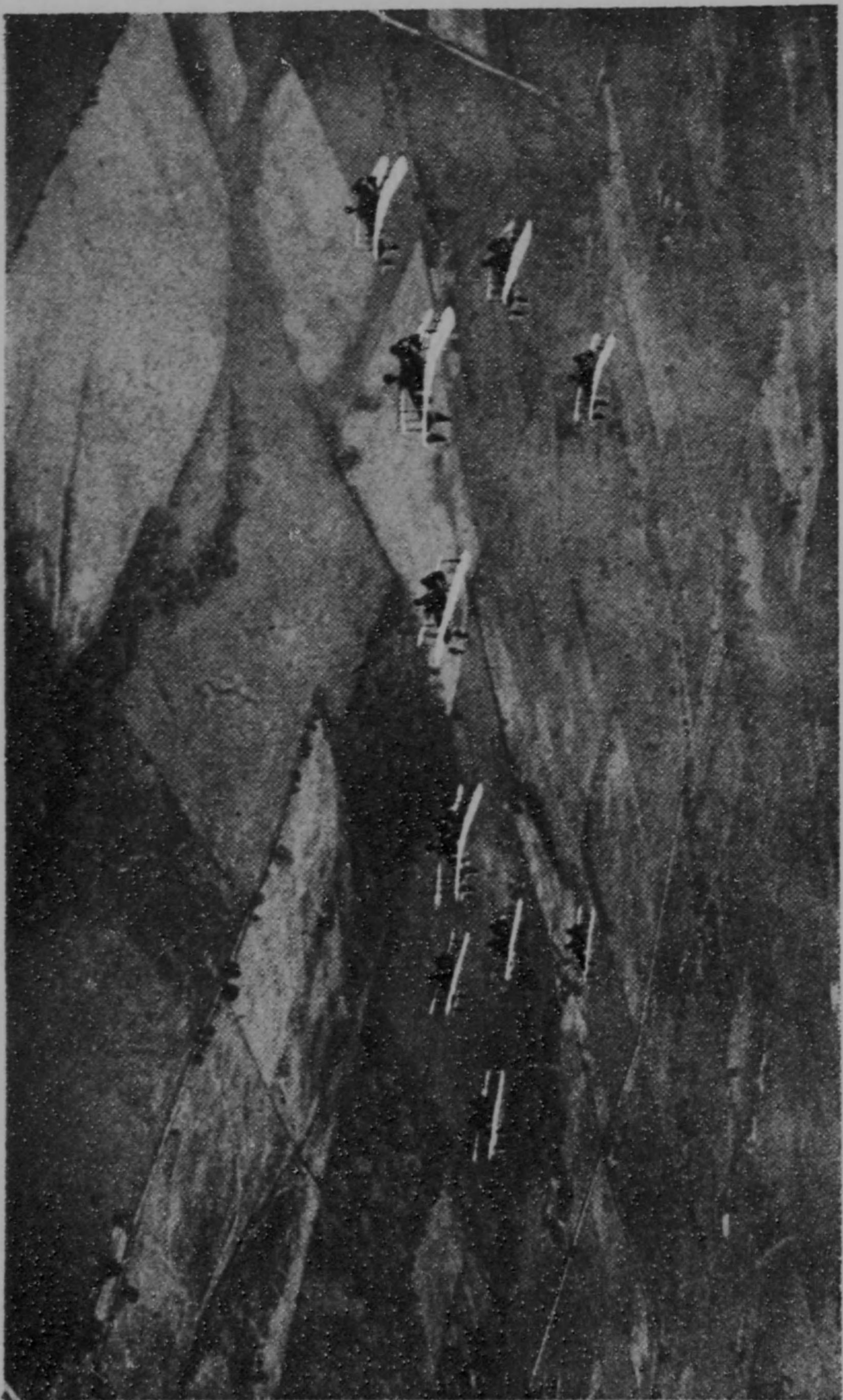
「ガトラス」艦母空航の中過通河運マナバ



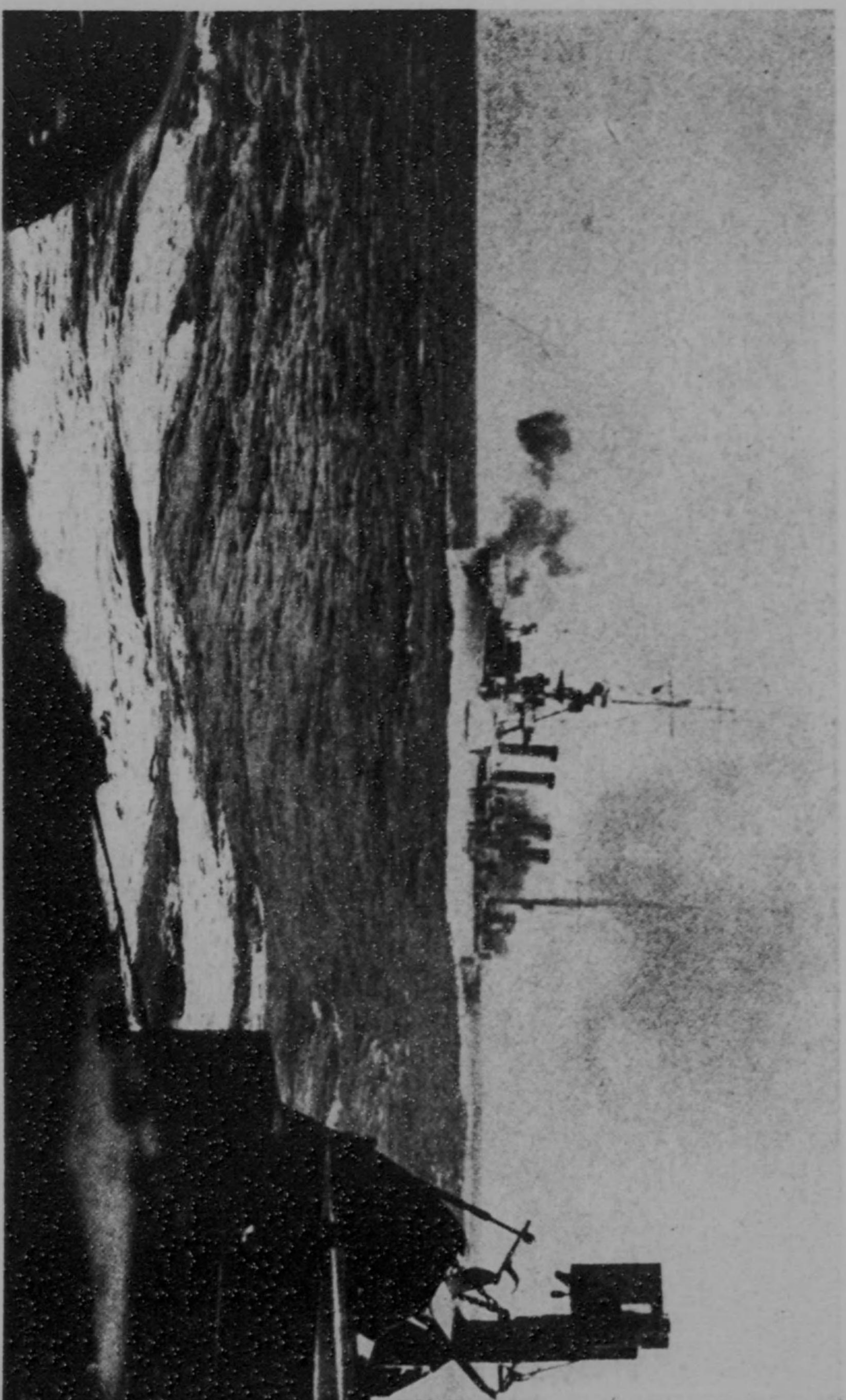
「ラコサンベ」艦洋巡噸萬一新の國米
よ見を砲時八の門十るた々堂



米海軍の進限地布哇ル軍港



米陸軍飛行隊の爆撃河智



主カ守る輸陣米の國巡洋艦

況 實 の 艦 軍 化



606-176

凡例 (序に代へて)

一、本書の数字的基礎は次の年鑑(各年度)である。

「日本引」統計年鑑」

「滿蒙年鑑」

Macmillan's the Statesmen's Year-Book.

Daily mail Year-Book.

H. G. W. Woodhead the China Year-Book.

二、軍事的數字は多くは左の年鑑に據つた。

「海軍及海事要覽」

Jane's Fighting ships.

Brassey's Naval and Shipping Annual.

Jane's all the world's aircraft.

三、最も多く参考にした軍事専門定期刊行物は左の一種である。

United States Naval Institute Proceedings

四、軍事に関する準専門書として次の四種をお奨めしたい。

陸軍に關しては、

Colonel J. Fuller-On Future Warfare.

海軍に關しては、

海軍少將福田一郎「潜水艦戰」

空軍に關しては、

川島清治郎「空中國防」

Colonel Wm. Mitchell-Winged Defense: the Development and Possibilities of Modern

Air Power, Economic and Military.

ともに、近代戰爭に對する理解を深める點に於いて、大いに役立つであらう。

五、本書は前著「軍縮の不安と太平洋戰爭」に對する修正補遺であるとともに、次著「日本の新國防」の序編である。又、太平洋及び極東戰略圖は次著に添附することにした。お許しを乞ふ次第である。

昭和五年十二月三日

砧村喜多見成城二三〇に於いて

平田晋策

目次

中華民國の挑戦

黄浦江上の軍艦「明石」……………	三
支那國民黨の錯覺……………	五
滿洲を守る日本……………	九
ソヴェート聯邦と滿洲……………	一七
滿洲は日本の生命的地域……………	二四
支那の新經濟政策……………	三〇
支那陸軍の空想……………	三五

帝國主義アメリカの攻勢

支那の共同作戦國……………四一

重工業國アメリカの戦争能力……………四六

戦争熱望期に入らんとする米國……………五四

英米戦争は軍事的に不可能に近い……………五八

米國支那政策の第一期……………六六

米國の經濟政策第二段階に入る……………七二

米國海軍の戦争能力

帝國主義の遂行機關……………七九

米國海軍の強行的戦法……………八六

短期作戦は戦争の原則……………九二

米國の戰略的地形……………九七

一九三一年の米國艦隊……………一〇二

五年後の新艦隊……………一一二

空中戦争

空軍の威力……………一一九

米國の空軍政策……………一二三

米軍の空中戦術……………一三一

東京空襲は牽制作戦……………一四一

天才的空軍司令官の出現……………一五〇

プラット大將の新戦法

決戦を強制する米國艦隊……………一五八

完成に近づいた輪型陣……………一六三

遠征軍は果して不利か……………一七〇

米軍の戦闘精神……………一七四

小笠島東方の決戦……………一七九

日本海軍の南洋作戦

比律賓は米國の主作戦地ではない……………	一八三
米國亞細亞艦隊の貿易破壊戦……………	一八九
容易なるガム、困難なる比島……………	一九三
比律賓に於ける空中戦……………	一九八
危険極まる上陸作業……………	二〇二

日本陸軍の戦時行動

比律賓作戦……………	二〇七
遠征軍の苦境……………	二一一
米國陸軍航空隊……………	二一六
大陸戦と支那陸軍……………	二二〇
ソヴェート軍……………	二二六
滿蒙に於ける軍事行動……………	二三七

果して作戦絶望か

日本の戦略地位……………	二四三
舊攻勢防禦作戦……………	二四七
潜水艦の任務は愈々重大……………	二五二
敵哨戒線及び輪型陣の撃破……………	二五八
果して絶望か……………	二六二

附録 一

米國海軍政策……………	二六七
-------------	-----

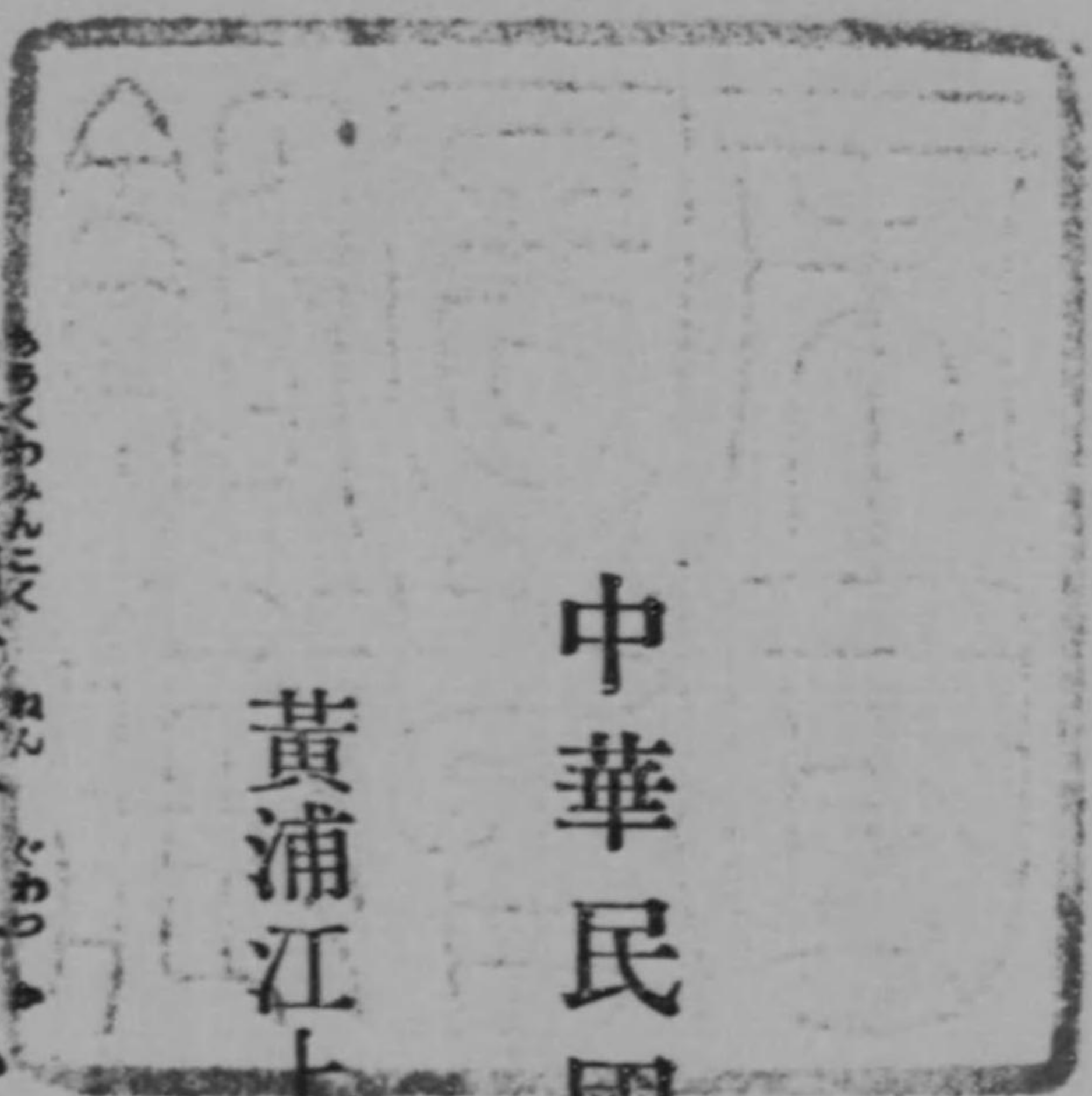
附録 二

一九三〇年ロンドン海軍條約正文……………	二八一
----------------------	-----

極東戦争と米國海軍

中華民國の挑戦

黄浦江上の軍艦「明石」



中華民國十年十月十日、私は上海黄浦江灘路に立つて、黄浦江上に碇泊する英國巡洋艦「ホーキンス」を指しながら、老友黄界民君に訊ねました。

「黄さん、貴方の民族革命運動も、もう十何年になります、英國軍艦旗は依然として楊子江を壓へて居りますね。」

すると、黄君は昂然として答へました。

「もう十年待ち給へ。きつと彼等の砲艦政策を敲き潰してやるから。」

その日は丁度双节。清朝を倒した辛亥革命の十周年記念日で、翩翩たる五色旗が花のや

うに上海の市街を埋めて居りました。

黄君は「ホーキンス」を睨みながら何時までも埠頭に立つて英國の帝國主義政策を攻撃して居りましたが、やがてにやりと笑つて、私の肩を叩きました。

「平田君、よく見給へ、英國の次にはあれをやるんだ。」

彼は顎でしやくるやうにして、蘇州河が黄浦江に合流して居る邊りを示しました。

私は黙つて答へませんでした。そこには我が二本烟突の小巡洋艦「明石」が、濃鼠色の艦體を靜かに濁流に浮べて居つたのであります。

「明石」の向ふには「禁有」型らしい七百噸位の支那砲艦が、見窄らしい恰好をして泊つて居りました。艦尾の軍艦旗がだらりと垂れて、とても戦闘能力があらうとは思はれません。

然し、「明石」を見つめる黄君の眼は、彼等の所謂「帝國主義日本」に對する憎惡の感情で火のやうに燃えて居りました。

そしてこの黄君の感情が、單に黄君一個人の感情ではなく、全支那の青年諸君の感情であ

ることを知つて居る私は、暗然として近き未來に起るべき國家的悲劇を想はずには居られませんでした。

思ふに支那人諸君の日本に對する惡感情は、日本が大陸から總退却しない限り、永久に消えるべきものではありません。そしてこの心理的及び經濟的原因から生じた民族的惡感情の消えぬ限り、日本と支那とは必ず何等かの争鬭を起さねばならぬ悲劇的運命に置かれて居るのであります。

支那國民黨の錯覺

このことは、支那の國民黨の諸君が最も良く知つて居ります。彼等の外交政策及び經濟政策は根本精神に於て終始一貫して排日的であります。蔣介石君が個人として如何に日本人間に多くの友人を持つて居りましても、國民政府首席としての彼は、どこ迄も日本に對する反對的精神を捨てないのであります。これは日本人好きのする戴天仇君にしても同じことであ

ります。

一體國民政府の要人中、果して何人が日本を支那の友邦と見て居るであらうか。胡漢民君か、何應欽か、方本仁か、又は宋子文君か。彼等は日本を敵とこそ思へ、夢にも味方だなどと考へるやうな人物ではないのであります。

況んや革命思想の洗禮を受けた青年將校や學生が、どんな眼で日本を見て居るかは、今更申す迄もありません。

彼等の眼に映する日本の姿は、最も惡辣なる侵略主義國家であります。國民政府は小學校の教科書に於て、日本の對支政策を根本的に否定し、排斥した宣傳を大規模にやつて居ります。

國民黨黨化教育の實情を調べて見ますと、彼等は單なる關稅自主權の獲得や、通商條約の改訂を要求して居るのではありません。問題はもつと深刻且つ重大であります。

彼等の要求するところは、日本にとつて生命的關係のある關東州及び南滿洲鐵道の返還

であります。そして日本がこの要求を承認しない以上、支那は外交的に經濟的に、且つ軍事的に、總ゆる方面の排日行動を今後愈々擴大し繼續するであります。

更に臺灣の還附、朝鮮の獨立が、第二次的な彼等の要求であります。

然しこれらは何も今更愕くに當らないことでありまして、一九二〇年に、上海で孫文を黨首とする中國國民黨が組織せられた時から、既に決定して居つた彼等の經國方略であります。

今日の日本は支那政府の母胎である國民黨の本質を、もつともつと吟味する必要があるあります。

國民黨の建國程序には、「打倒帝國主義」の文字が最も大きく記されて居り、且つ打倒の二大目標が、北支に於て日本、南支に於て英國であることは、我等の殊に忘れてならないところであります。

「國民黨小學黨化教材」には、到る處に排日、排英の血腥ぐさい記事が出て居つて、執拗深

刻な彼等の敵對觀念が、ひしくと讀む者の胸に迫つて來ます。

そして日本の對支政策に對する彼等の攻撃は、主として、大正四年五月に締結された日支條約に集中されて居るのであります。

二十一箇條の名で世界的に知られて居るこの條約は、一九二三年を以て期限の切れる關東州租借地を一九九七年に、南滿洲鐵道及び同安奉線を二〇〇二年と二〇〇七年に延期しました。これによつて日本の大陸政策の根據基點は、約一世紀間法律的に確守されることになつた譯でありまして、我國にとつて最も生命的關係ある歴史的條約であります。

しかし支那の國民黨は、これを最も重大な屈辱條約と見まして、「國耻讀本」第一冊第一課に、次のやうな悲憤の哀詩を載せて居るのであります。

「五月の裏、桑椹熟す、烈日炎炎として威脅を施し、無情の條件太だ嚴酷。

五月の裏、風習々たり、最後通牒都て承認し、羞を含み辱を忍んで長太息す。」

これは少なくとも私の知つて居る限りの、國民黨員諸君の偽らざる感情であります。彼等

の眼には、南滿洲鐵道會社が二十世紀の東印度會社として映り、我が關東長官、關東軍司令官が往年のアレキシエーフ總督、クロボトキン司令官の如く思へるのであります。

謝彬の「中國喪地史」一卷を讀めば、私達は滿洲に對する彼等の心理をよく知ることが出來ます。彼は滿洲を「喪地」「掠奪者日本に奪はれたる土地」と稱して居ります。しかし乍ら、日本が何故に滿洲に進出しなければならなかつたか、又その進出が、如何に犠牲の多い苦しいものであつたかといふことには何等の考察も向けようとはしません。

然し、たゞ單に「滿洲は歴史地理的に支那の領土であつた。」といふだけの理由で、國民黨の諸君が、日本に退去命令を下したところで、それは理論としても決して成立つものではないのであります。

私は今から滿洲に對する支那國民黨諸君の迷妄と錯覺を批判したいと思います。

滿洲を守れる日本

滿洲は、政治地理的には、既に三十數年以前に半ば支那の手から離れて居つた土地であります。

一八九五年、日清戦争によつて支那の朝鮮侵入を撃退した日本は、更に遼東半島に據つて露西亞の南下を防禦しようとした。

これは鐵の如く冷やかであつた當時の露西亞帝國の極東政策に對する、最も切實な自己防衛手段であつたのであります。

露西亞の西伯利亞占領、滿洲進出が、いかに圖々しく、いかに徹底して居つたかは、今更申す迄もありません。

日本が戰國時代にあつた十六世紀の末葉、一五八一年、長槍を閃めかしたコサツクの馬隊が、怪賊エルマークに率ゐられて、ウラル山脈を越え、トポール河畔の韃靼部落を襲撃したのを皮切りとして、傍若無人な露西亞の極東侵畧は、三世紀に涉つて續けられたのであります。

コサツク乗馬隊は、曠野を横斷し、密林をくゞり、次々に土人の小部落を占領しながら、東へ東へと馬蹄の印をつけて行きました。

彼等がトボルスク府に根據地を築いて以來、オビ河を渡り、エニセイ河を越え、バイカル湖を後にして、太平洋岸に達する迄に、僅々半世紀を要したのみでありました。

アトラソフが七十人の騎兵とともにカムチャツカ半島を占領したのは、一六九七年でありそれから十年後には、彼等の姿は、白水海を渡つて、狼群の國アラスカ、ユーコン河畔の密林に現はれたのであります。

その間彼等は殆んど血といふ程の血を流して居りません。今日、ソヴェート聯邦が我物顔に振舞つて居ります廣袤五百三十萬方里のあの西伯利亞は、かくも易々と困難なく露西亞の手に落ちたものであります。

しかし今日の露西亞がどこまでも西伯利亞の領土權を確守し、世界も亦それを認めて居ります所以は、露西亞人が、コサツク占領後の西伯利亞に於いて、耕地開拓、鑛脈採掘、市街

建設、鐵道敷設等の事業をやつたからであります。

しかも西伯利亞、少なくとも極東西伯利亞に對して注いだ露西亞の苦心と、南滿洲に對して拂つた日本の犠牲とを考へて見ますと、形而上、形而下ともに、こちらの方が多いためです。

云ふ迄もなく朝鮮と南滿洲とは日本にとつて最も重大な地點であります。日清戦争に於いて戰艦なき艦隊を以て當時東洋の無敵艦隊と怖れられて居つた丁汝昌の北洋水師と闘ひ、僅か七個鎮臺の兵を以て牙山に、平壤に、九連城に、牛莊に轉戦したのも、たゞこの重大地點を守らんが爲めでありました。

しかも露帝ニコラス二世を代表者とする露獨佛三國の強制的要求によつて、血で贖つた遼東半島は、一度びは日本の手から奪はれたのであります。それと同時に露西亞は一八九六年明治二十九年初夏、莫斯科に於ける露帝戴冠式の砌、外務大臣ロバノフが支那の特命大使李鴻章を脅迫して、滿洲に於ける鐵道敷設權を獲得しました。

私は支那國民黨の諸君は、少しく當時の暗澹たりし滿洲を回顧する必要があると思ひます。この土地の爲めに血まで流した日本が、追ひ拂はれたその後へ、露西亞は如何にして入つて來たか。

東清鐵道會社の設立とともに、小白山の山陰にも、松花江の河岸にも、興安嶺の森林にも海拉爾の草原にも、いたるところに露西亞兵の影が見られました。そして明治三十年の十二月十八日、旅順港頭、露西亞艦隊の聖アンドリュウ旗が寒風に翻つた時、南滿洲も、遂に彼等の支配下に置かるべき運命に決したのであります。

三十一年三月二十七日、北京でハヴロフ條約が結ばれるに至つて、露西亞は遂に全滿洲の主人公となりました。そして彼等の滿洲占領行爲は、明治三十三年、十九世紀最後の年に於て絶頂に達しました。

この年、山東に起つた拳匪の亂が滿洲にも波及して、支那の民兵は一時ゲルングロス將軍

の露西亞守備軍を打ち破り、ハルビン、旅順を除く、全東清鐵道を占領したのであります。すると、露帝は直ちに動員令を發し、軍用列車は陸續として、新開通の西伯利亞鐵道を東へ東へと走りました。

敬愛なる支那國民黨の諸君よ。忽ち露軍の灰色の軍服で埋められたその時の滿洲が、如何なる状景を呈出したかを追想して見給へ。

歴史に暗い諸君は、恐らく何も知らないであらう。然し、ハル濱を包圍して居た支那民兵が、グロデコフ軍の爲めにどんな目に遭はされたか。レンネンキャンプ少將が齊々ハルと吉林でどんなことをしたか。スポテイン少將の一軍が奉天で如何なる行動を執つたか。——それらの事件を諸君が調べ終つたならば、暫しは茫然として何等の言葉も發することが出来ないに違ひないであります。

私はここで舊露西亞軍の古傷を洗ひたくはありません。たゞ明治三十三年、一九〇〇年の秋には、十萬の露軍が東清鐵道沿線に配備されて、支那の滿洲に於ける主權は單に法律上

にのみ限られた、それこそ全く一片の破古紙に過ぎなかつたといふことを指摘したいのであります。

旅順にあつた極東總督アレキシエーフ大將の指揮の下に、鐵道敷設、市街建設、要塞築造等の事業が急速に行はれつゝあつた日露戦前の南滿洲は、全く新露西亞の觀を呈して居りました。

これに對して支那政府及び支那人諸君は如何なる態度に出ましたでせうか。明治三十一年五月二十八日、悄然として旅順を引上げた守備隊の憐れむ可き姿が、實に全支那の態度を代表したものであります。

即ち、支那は露西亞の侵入に對して何等の抵抗力を持たなかつたのであります。滿洲を政治的、軍事的且つ經濟的に占領しようとする露西亞に對して、當時の支那人、即ち現國民黨員諸君の父兄達は、たゞ恐怖して拱手するの他爲すところを知らなかつたのだといふ事實は我々が十分に記憶して置かねばならぬところであります。

換言すれば、支那は事實に於て主權を放棄したのであります。故に政治地理的意味に於ける滿洲は、一九〇〇年前後を以て、支那の手を離れたものと見て、必ずしも失當でありませぬ。

そして、その時に實力を以つて露西亞の南下政策を阻止したものは、自國軍隊の血を流した遼東半島が、農奴兵の泥靴で蹂躪されるのを見かねた、我が日本でありました。このことは如何に僻見の多い支那青年諸君と雖も認めない譯には行かないであります。

日本は敢て支那の爲めに滿洲を守る可く露西亞と戦つたではありません。日本が國力を賭して陸にクロボトキン、リネウキツチ軍と戦ひ、海にスタルク、マカロフ、ウキトゲフト、ロヂエストウエンスキー艦隊と見えたのは、止むに止まれぬ自己防衛の行動でありました。

明治三十七年二月十日に煥發された宣戰の詔勅にも示されて居ります如く、朝鮮の存亡は實に日本の運命の岐點であります。そして朝鮮の防禦は、少なくとも南滿洲を緩衝地帯としなければ困難であります。

故に露軍の滿洲集中は、日本にとつて絶大の脅威でありました。殊に朝鮮國境に對する彼等の軍事行動が開始されるのを見ましては、いかにしても、自己防禦の軍を動かさずには居られなかつたのであります。

かくして、日本は、國運を賭した危険極まる冒險を敢行しました。要塞戦に、野戦に、海戦に、更に單線の軍隊を活動させる爲めの後方の經濟的活動に、日本人は全く血と汗とにまみれた二箇年を過したのであります。

日露戦争の敗北によつて、露西亞は濫々南滿洲から手を引きました。若しあの時日本の軍事行動がなかつたならば、一九一〇年代迄に、滿洲は必ずや事實上、露西亞の領土となつて居つたに違ひありません。戦後、南滿洲を退却した露西亞は、自然北滿洲に對する政策も退嬰的となり、さうして滿洲の獨立は辛くも保たれました。

ソヴェエト聯邦と滿洲

かく云へば、支那青年諸君中の急進論者は、「若し滿洲が露西亞の手に落ちて居たならば、一九一七年のボルシエヰキ革命の日に、支那へ返つたであらう」と云ふかも知れません。現に私は一九二一年の第三國際共産黨大會の當時、急進雜誌「東方雜誌」上にそんな議論を見たことがあります。まことに嗤ふに耐えた迷妄であります。

若し歴史地理的領土權を主張するならば、露領黒龍江沿岸は、正しく支那の領土でありませう。しかしソヴェート政府は、何時沿海州を還附しようとしたでありませうか。

一九一九年の夏（大正八年）ソヴェートの外務委員カラハンは、支那國民及び南北政府に對して、有名な對支宣言を發しました。

それに依りますと、ソヴェート政府は、舊露西亞政府が滿洲及び其他の地方で奪取した總ての土地を拋棄するといふのであります。成程、當時西伯利亞には日本軍を主力とする列國軍隊が駐屯し、東支鐵道も亦列國の手で動かされて居りました爲めに、カラハンの言葉は、いかにも尤もらしく支那人の耳に響いたのであります。

故に一九二三年の初秋、彼が北京に入京した時の支那政府及び學生の歡迎振りは實に素晴らしいものであります。しかし、入京後の彼は、南方政府の顧問ボロチンと共に、楊子江岸に於ける英國勢力の驅逐に就いては大いに支那を助けたのであります。先に拋棄聲明をやつた沿海州の領土權等に就いては、全く口を拭つて知らぬ顔をして居つたのであります。

大正十一年十一月二十五日の午後三時、日本軍撤退後の浦鹽へ、赤旗を靡かせた一個中隊の騎兵が到着した時に、ソヴェート政府は、帝政露西亞が極東に残した遺産を、完全に相續したのであります。かうなればカラハンの對支宣言等は黙殺されて仕舞ふより他ありません。今や新しい露西亞は、經濟五年計畫の名の下に、極東西伯利亞を完全に露西亞ナイズしつゝあります。

更に東支鐵道問題に關するソヴェート聯邦の態度はどうでありませうか、僅かに「共同經營」といふことが、彼等の最大な讓歩でありました。

しかも一九二九年（昭和四年）の五月、支那が直接行動に訴へてこの鐵道を回收しました

時、ソヴェート政府は直ちに國境に軍隊を集中し、莫斯科では組織的な大示威運動が行はれました。

私は不幸にして露西亞語を知りませぬ爲めに、原文を示すことが出来ませぬが、當時の The Japan Advertiser によりますと、七月十四日の共產黨機關紙「プラウダ」は、こんなことを云つて居ります。

「支那國民黨の帝國主義的反露政策は、田中、チエンパレン、張作霖等の時代より一層惡化した。彼等支那人は、世界の帝國主義の下僕にひとしい無頼漢である。のぼせ切つた南京政府と奉天の不良軍隊は、遂に我がソヴェート政府をして、東支鐵道保護の手段に出づるの止むなきに立ち至らしめたのである。」

かうして軍隊は動員せられ、領土權益の抛棄を聲明した一九一九年の對支宣言の精神は、何時の間にか消滅してしまつたのであります。

東支鐵道に關する争鬭は、支那の敗北をもつて終りました。この小戦争によつて、支那は

悲惨にも、ソヴェート露西亞の威力を満喫しなければならなかつたのであります。

一九二九年十一月二十一日、海拉爾を空襲した五機のソヴェート飛行機は、數十箇の爆彈を投下し、一萬の支那西路軍に對して非常な恐怖と戦慄を與へて去りました。

同十七日の滿洲里空襲は、戦闘機二十六機を以つて行はれ、色を失つた支那軍は、わづかに高射砲の間歇的射撃をもつて應戦するより他仕方がなかつたのであります。

支那の國民黨諸君は、定めし、ソヴェート軍の飛行機と、戦車と、二十珙重砲を前にして國權回收の困難を痛感したのでありませう。

かうして考へて参りますと、一九〇〇年代に於ける滿洲の露西亞化が、その後も繼續せられて居りましたならば、今日の滿洲は恐らく赤色旗の支配下にあつたでありませう。

故に殆んど露西亞の手に歸しようとした滿洲を、生命を懸けて奪回した我が日本は、當然その地の政治的主權者たるべきものであります。

重ねて申しますが、明治三十三年頃から六、七年にかけて、支那は殆んど滿洲の主權を喪

失して居つたのであります。

今日、張學良君が本據として居る奉天城内も、明治三十六年十月二十八日には、露西亞の軍隊に占領せられて、金鷲殿上に三色旗が翻つたのであります。

そしてこの國旗を曳下したものは、支那人ではなくて、日本の軍隊でありました。

今日、滿鐵連長線を北上して、高粱黄ばむ南滿洲の曠野を過ぎますと、到る處の河川、丘陵に日本軍苦戦の跡を望見するのであります。

奥、スタケルベルヒ兩軍遭遇戦の跡、得利寺、遼陽の次驛首山近く、車窓に迫つて來るが如き褐色の丘首山堡、更に我が軍苦戦の地沙河の松林等、連長線四百三十五哩の鐵路は、宛然、兵士の死屍を踏んで走るやうなものであります。

更に渾河の鐵橋を渡る時には、明治三十八年三月の氷風を身にかけて、五十七萬の日露兩軍の行動が、彷彿として眼底に浮んで來るであります。

奉天戦は、日本陸軍がその戰鬥能力を極度に發揮した戦ひであります。それとともに、ク

ロポトキン大將を繞るリネウキツチ、カウリバルス大將等が死力を盡して防戦した戦ひであります。彼等の死傷者は實に十六萬を算しました。南方支那の青年將校諸君は、一度この戦

ひの跡を十分に見學する必要があると、少なくとも、クロポトキン大將の My War Mem-

oir の位は熟讀すべきであります。

私の友人である或る支那將校は、旅順東鷄冠山の堡壘跡に立つて、初めて日本の滿洲政策のベースが分つた、と申しました。

まことにその通りであります。日本の滿洲政策の根柢が「血」であることを、支那人諸君は知らねばなりません。

しかも、二十二萬七千の戦士の血を流した日本は、如何なるものを滿洲に獲たかと云へば、たゞ小半島の一角を租借し、連長、安奉二條の鐵路に列車を走らすことが出来るやうになつたのみであります。

これでは、支那人の所謂「帝國主義」日本は、「社會主義」ソヴエート聯邦よりも遙かに謙

譲だと云はねばなりません。

滿洲は日本の生命的地域

しかし、今日の滿洲は單に軍事地理的意味のみではなく、經濟的關係に於て、最早日本とはどうしても離れることの出来ない状態にあります。

日本は舊露西亞と違つて、敢て滿洲を政治的領土としようとはしませんでした。故に多くの地圖は、この地方を支那本部と同じく黄色に塗つて居ります。

さりながら、日本も自國が近代國家として生存して行く上に、如何に滿蒙が必要であるかといふことは知つて居ります。それでありますから、この地方に對する日本の經濟的進出は相當に猛烈でありました。

南滿洲鐵道會社の創立以來、滿洲が如何に世界經濟單位としての地位を高めたかは、全く驚異に値するものであります。

大連港のみに就いて見ましても、一九〇七年（明治四十年）大連海關が開設された年の貿易額は、僅かに一億四千二百萬海關兩でありましたが、一九二六年以後（昭和年代）は常に六億兩臺を示して居ります。

そして、この大貨物を吞吐する大連埠頭の築造に至つては、これ亦日本人の工業的建設能力を發揮して遺憾ないものであります。

五千噸級船を一時に三十七隻撃留するこの出来る一萬四千三百呎の撃船岸壁は、我が滿洲經濟政策の基點として、十分の重みを示して居ります。日本郵船、大阪商船、近海郵船等の社船が、滿鐵直系の大連汽船や多くの社外船とともに、この埠頭を基點として、日本の生命線を維持して居る状態は一種の壯觀であります。こゝ數年間の我が出入船舶量は年平均八百萬噸を超過し、支那の百萬噸、英國の九十萬噸、獨逸の七十萬噸、米國の四十萬噸等を斷然壓倒し去つて居るのであります。

南滿洲鐵道會社に關しましては、今更申す迄もありません。この會社が、創設以來四半

世紀の間、いかに滿洲の經濟的、文化的開拓者として大なる使命を果して來たかは、どんな偏見論者と雖も認めない譯には行かないのであります。

公稱資本金四億四千萬圓を擁し、六百九十八哩の鐵道運輸事業を中心として、炭礦業、製鐵業、港灣經營等の雄大無比な産業システムを有するこの會社が、一部の日本人、露西亞人及び支那國民黨の諸君から、經濟的帝國主義の前衛だと悪口されるのは一應無理はありませぬ。

殊に海運、瓦斯、電氣等各産業分野の事業を分擔する公稱資本合計二億二千五百萬に達する五十七の關係會社群を見まするときには、誰れしも滿洲の經濟實權を獨占するものとして滿鐵を白眼視せずには居られないのでありませう。

しかし乍ら、そんな感情は所謂小兒病的感情に過ぎないのでありまして、「産業統制」が今世紀に於ける經濟界の必然的趨勢であることを知る者は、滿鐵の大システムに對して、徒らに呪咀の聲を放つが如き、愚かな眞似は出來ないのであります。

滿鐵があれだけの組織と統制力を持つて居りますればこそ、困難な滿洲の開發事業も可能なのであります。そしてこの根強い統制力があればこそ、同社は世界的不況時代にあつて、年額平均五千萬圓の利益金を計上しつゝ、世界に於ける滿洲の經濟的地位を確保することが出來て居るのであります。

故に滿鐵が大なれば大なるだけ、滿洲の經濟的地位は強固になるのでありまして、寧ろ心配しなればならぬのは、會社の統制力が弱くなることであります。

滿鐵會社は營利會社であるとともに、一種の政策遂行機關である以上、その經濟行動はどこまでも意思的であらねばなりません。

創立初期の理事諸君は、同社を日本の東印度會社と信じて働かれたのであります。勿論この考へは間違つて居ります。純然たる印度搾取機關であつた東印度會社と、計量することの出來ぬ利益を支那人に與へつゝある滿鐵とは、本質的に大いに相異して居ります。

しかし私は、初期の理事であつたT氏から、「滿鐵、東印度會社論」を聞かされました時

には、論の當否は別として、その男性的な意思力に、心から共感せずには居られませんでした。

大陸の經濟的開發は、最も男性的な難事業であります。嘗つては南阿、濠洲、北米等に於てアングロサクソン民族が、美事な開拓事業をやり遂げました。今や新興の露西亞が果してどの程度迄やり得るかどうかは疑問であります。國家的組織の下に、着々として極東西伯利亞の開發事業を進めつゝあります。

日本は既に二十五箇年間滿洲開發を續けて來ました。然し、まだく事業は漸く第一期を終つたのみであります。

撫順炭礦はまだ十億噸の石炭を埋藏し、約五十億噸のオイルセルからは、漸く七萬五千噸の石油が採られて居るに過ぎません。撫順に匹敵すると云はれる新邱の大炭礦に至つては殆んど未採掘のまゝであります。更に約十五億噸に近いことを豫測される沿線の鐵礦石を消化するには、鞍山及び本溪湖製鐵所の鑄鐵爐は、餘りにも小さいではありませんか。

滿鐵の活動はこれからであります。況んや内蒙古の羊毛事業等は、國家の最も痛切に要求するものであるに拘らず、滿蒙毛織會社が僅かに五十萬封度の生産をやつて居るだけであります。滿蒙二千百萬町歩の耕地面積も、半ばは未墾の處女地ではありませんか。

日本は徒らにソヴェートの極東開發等を羨望し、白眼視することなく、滿鐵を中心勢力として、何處迄もその産業的範圍を滿蒙に擴充すべきであります。

そしてこの日本の經濟政策は現行の條約によつても、十分合理的に支持されるのであります。

とまれ、日本の滿洲に於ける行動は、時に滿鐵及び各政治機關の失策がありますけれども大體に於いて國家的組織の威力を發揮しつゝあります。

そして、石炭、石油、鐵、肥料、羊毛等の重大資源を抱藏する滿洲は、永遠に日本にとつて生命的地域であります。故に日本は將來如何なることがあつても、滿洲から退却はしないでありませう。

少數の異論家が、嘗つてのカラハンの如く、滿洲拋棄論を唱へることはあるかも知れませぬ。しかし日本の國家意思は、そんな空想的意見によつて動かされるものではないのであります。

滿洲奪回を空想する支那國民黨の諸君は、滿洲史を再讀するとともに、この地方に對する日本の國家意思が、どんなに強固なものであるかを、十分に知つて置く必要があらうと思ひます。

支那の新經濟政策

滿鐵一社に就いて見ましても、事業投資七億圓に垂んとし、我が全投資額に至つては實に十五億圓に達して居ります。そしてこの數字は決して單なる數字ではなく、帝國日本の四半世紀に涉る國家的活動を表現し、更に未來に對する活動を豫告したものであります。大正四年の日支條約が規定した土地商租權も東部內蒙古に於ける農工業經營權も、まだ殆んど利用されて居りません。日本が農業的に滿洲を自己の産業範圍とするのはこれからであります。製鐵業も、硫酸肥料工業も、曹達灰工業も、窯業も、オイル・セール事業も、すべて今後に残された事業であります。

日本は如何なることがあつても、これらの國家的産業を拋棄するものではありません。鐵道に就いて見ましても、滿鐵六百九十八哩の他に、借款官辦の洮昂（一四二哩）四昂、（二六五哩）吉長（七九哩）、吉敦（一三二哩）、日支合辦の金福（六三哩）、溪城（一四哩）天圖鐵道（六九哩）等（七百十四哩）に日本資本が入つて居ります。

しかし、漸く政治的統一の形式が實現した支那は、今や事毎に日本に對して經濟的挑戰態度に出ようとして居ります。

借款、合辦の各鐵道も、吉長、金福、溪城吉敦等を除いては、日本の勢力は甚だ憚らぬものがあるのであります。

しかも支那の自辦鐵道は、北平から奉天に至る北寧鐵路（四六四哩）の他に、滿鐵及び吉

長鐵道と並行して奉天と吉林を繋ぐ、瀋海、輝吉兩鐵路三百九哩が開通して、非常な勢ひであります。この鐵道は支那自身の資本と、支那自身の技術で敷設したものでありまして、支那人は、「これによつて我が民族の科學的能力が立證された」と有頂天になつて居ります。

今年の十月中旬に、青天白日滿地紅旗を機關車の前部に交叉した急行列車が、滿鐵をクロスして、吉林から北平へ直走しました。奉天の「東三省公報」「東三省民報」等は、これを「中國鐵路の勝利だ」と云つて、感激的文字をゴテくと紙面に羅列したものであります。車輛は滿鐵の古手などを使用して居るやうであります。兎に角工業能力の低い支那人としては、なかくやつて居るやうであります。

この鐵道の開通が、如何にして支那人を刺戟したかは、我々の想像以上でありまして、彼等は今や、滿鐵でも、東支鐵道でも、回收さへすれば支那人の手で動かせるんだ、といふ自信或ひは迷妄を抱いて居るのであります。

北寧鐵路の打通線（通遼—打虎山）百五十六哩も同じく滿鐵に對する一種の挑戰的並行線

であります。この線は南下して葫蘆島に達し、東北に走つて哈爾濱を経て黑龍江省の海倫に至るであります。更に通遼から洮南を経て齊齊哈爾に達する線と、打虎山から奉天を通過して吉林に至る幹線とが、こゝを接續點として走つて居る状態は、まるで滿鐵に對する包圍線が布かれた觀がいたします。勿論途中を繼ぐ洮昂、四洮の二鐵道には日本の資本が入つて居りますが、それとても奉天政府の管轄下にあるのであります。そして國民政府が和蘭銀公司の借款によつて造らうとしてゐる葫蘆島の築港は、この鐵道網を海上線に連結するものであります。全く滿鐵に對する公然たるチャレンジであります。

葫蘆島築港の完成は五年後であり、しかも完成後も年三百萬噸（大連の約三分一）の貨物を吞吐するに過ぎないのでありますから、經濟的威脅は案外に少ないかも知れません。しかし、支那の滿洲に於ける鐵道政策そのものが、明らかに日本勢力の驅逐を目標として居ることは、どこまでも注視に値するのであります。

鐵道のみではありません。全産業分野に涉つて、支那が如何に性急に外國勢力（殊に日、

英(露)の驅逐を企圖して居るか云ふことは、コンドリツフ編纂の「一九二九年の太平洋問題」Problems of the Pacific 1929 一卷を披けば、直ちに看取することが出来るであらう。

しかも日本は、支那の攻勢的鐵道政策に對して何時までも黙つて居るものではありません。必ずや吉會未完成線六十六哩の建設、その他長沈線、開吉線等大正七年の「滿蒙四鐵道建設覺書」による未通線を繞つて、支那人の所謂 Sino-Japanese Struggle が行はれるに違ひありません。

この鐵道戰の傍ら、鐵道百五十萬を有する我が在支紡績工場、揚子江航行を營業中心とする日清汽船等が、彼等の攻撃目標となるであらう。

今日の支那はやうやく中世紀的産業状態から脱却して、近代的工業時代へ入らうとして居るのであります。民國十七年(昭和三年)の六月、上海で全國經濟會議が開かれました時、中國銀行副總裁張公權は、支那の經濟的將來に對する自信ある意見を開陳して、國民黨々

員を非常に感激せしめました。

まことに張君が樂觀する如く、支那の産業的地位は、連續的に國內戰爭が行はれるのに拘らず、年々高くなつて行くのであります。民國十四年(大正十四年)の貿易額十七億四千百萬海關兩が、三年後の十七年(昭和三年)には二十一億八千七百萬海關兩になつて居ります。政府に豫算のない國家としては驚歎に値する統計であります。

支那陸軍の空想

しかもこの經濟的事情は、不幸にも支那人に一種の自惚れを與へました。

そして、その自惚れ心理は、直ちに對外行動となつて現はれずには居られません。露西亞に對する東支鐵道回收の如きも、或意味の自己陶醉から起つたことであります。産業改革の過程にある今日の支那は、過去に例のない程好戰的になつて居ります。殊に青年の軍事的能力が非常に進歩しました。



民國十五年七月、蔣介石が七軍編制の國民革命軍を率ゐて、第三次北伐の兵を發してから彼等は青天白日旗の下に、數十度の戰鬪を経験しました。その年の九月には早くも吳佩孚軍を武漢三鎮に破り、十一月には孫傳芳軍を江西の野に擊破し、民國十六年の春には、既に戰線を長江北岸に進めたのであります。

かうして民國十七年（昭和三年）の夏には、支那十八省悉く國民革命軍の手に歸しました。

以後蔣介石、馮玉祥、閻錫山、張學良等の間に、幾度かの争鬪が行はれ、廣東以來の國民黨同志の間にも屢々内部的抗争があつたのであります。青天白日滿地紅の黨旗は、北は黒龍江の沿岸より、南は瓊州海峡の一角にまで翻つて、兎に角も政治的統一の形式は成つたのであります。

思ふに國民革命戰に参加した支那將校諸君の、最も忘れ難い思ひ出は、民國十五年秋から十六年春にかけてやつた排英運動であります。あの時には、追の傲頑な英國人も、舊來の

常套手段たる砲艦政策が役に立たず、見苦しい漢口退去の一幕を演じなければなりません。でした。

わづかに巡洋艦「エメラルド」が六時の砲門八つを開いて南京攻撃に嚮を晴しましたけれど、英國海軍の威力は、最早シーモア提督が威風堂々戰艦「センチウリオン」に坐乗して居た一九〇〇年頃の、十分の一もなくなつたのであります。

かうした戰績は、當然の結果として、國民軍に自己の實力を過信させることになりました。中年以下の支那將校中、自國陸軍の戰鬪力に就いて、或種の自惚れを持たぬ者が何人あるでございませうか。

昭和三年五月の濟南事變によつて、支那軍と日本軍との戰鬪力は、遺憾なく徹底的に比較せられたのであります。彼等は尙、自己の軍事能力に對する過信を捨てようとはしませんでした。

「濟南で日本軍と戰つた軍隊は第一級の軍隊ではない」と云ふのであります。カデット軍

だつたら負けなかつたらう」と云ふのであります。

蔣介石直率の士官候補生軍（カデット軍）が、北伐戦に於いて非常に勇敢であつたことは否定出来ません。支那陸軍研究の權威者佐々木到一中佐も、名著「支那陸軍改造論」に於いて彼等の戦闘實力を認めて居ります。

然し、今日の支那軍隊を以つて、直ちに日本陸軍に挑戦出来るものとは、遺の彼等も思つて居りません。

故に國民政府は、今後軍の改編・陸軍軍制の大改革を實行する豫定であります。

それがどの程度迄實現するものか、どうかは疑問でありますが、兎に角支那が、日本及び露西亞を想定敵國として、中央軍五十萬、邊防軍五十萬を目標に、新陸軍の整備を始めることは動かすことの出来ぬ事實であります。まさか、支那の新陸軍が日本軍に必勝出来るとはいかなる夢想家も思ふことはないでせうが、局部的戦争に於いては、多くの支那將校は勝利の僥倖を期して居るのであります。

これは唾ふべき錯覺であるかも知りませんが、とにかく彼等はそのことを豫想して、訓練を勵み、兵術研究に熱中して居ります。

かくて、支那は、思想的に、經濟的に、且つ軍事的に、自然に對日戦争を誘發するやうな方向に進み行きつゝあります。

これは彼等の爲めにも、又日本のためにも、甚だ悲しむ可き傾向であります。翻つて思へば又、どうしてもかうなるのが、避け難い必然の途であるかも知りません。

昭和五年の十月、私は奉天城外東北大學の前で、支那騎兵隊の行進を見て一種の感慨に打たれました。丁度崗錫山の北平政府が没落に瀕して、東三省の兵は續々奉天に集中されつゝあつた時であります。

アメリカ型の軍服を着た彼等が、いかにも「新式陸軍だぞ」といふ誇らしい表情を浮べて、得々として行進する有様は、或意味に於て滑稽でありました。それでも十年前のだからのない支那軍とは、確かに變つて來て居ります。

然し、その爲めに、彼等が過當の自己評價をやつて、日本に對する戦争意識を深めるのだとしますれば、新陸軍の建設は、果して支那のために幸福かどうかと、私は疑はずには居られなかつたのであります。

帝國主義アメリカの攻勢

支那の共同作戰國

支那の軍制改革が、日本を目標として行はれるものであることは、軍事的見地から考へて否定出来ません。然し、彼等と雖も、獨力で日本と近代戦争をやることは、如何に危険であり、且つ不可能に近いかといふことは知つて居ります。

故に支那の戦争意思は純然たる獨立的なものではなく、背後に彼等を支援する協同作戰國があつてのことです。

そして背後の支援國と云へば、先づ露西亞と米國の他ありません。

然し乍ら露西亞——ソヴェート聯邦は、國民革命初期に於いてこそ、支那の有力な後援者

でありましたが、カラハン時代以後は、寧ろ敵對状態にある國家であります。東支鐵道問題と蒙古問題に於いて、露支兩國は永遠に争鬪すべき關係に置かれて居ります。

支那から見れば、依然として舊露西亞帝國の國境を繼承し、北滿及び蒙古に經濟的活動を續けようとする現ソヴェト政府は、一九二四年以前の消極的なソヴェト政府と違つて、殆んどツァール帝國と大同小異に映するではありません。又、露西亞とすれば、革命軍北伐當時の支那は、たしかに列國の經濟的帝國主義に對する解放戰を戦つて居つたが、今日の國民政府は、かへつて自ら經濟的帝國主義の走狗となつてしまつたではないか、と見るではありません。かくて、兩國は、目下或意味に於いて狸と狐の如き關係にあるのであります。故に彼等が日本に對する協同作戰行爲に出ることは、近き將來には殆んど豫想することが出来ません。

かくて支那の協同作戰國は、必然的に米國となりませう。

一九二九年、民國十八年三月に開かれた、國民黨第三次大會は、老大な新支那建設の財政

經濟計畫を作りました。

その時ソヴェートの機關紙「ブラウダ」は、「その金はどこから出るのだ」と毒つきました。財政難に苦しむ支那政府は、自國の開発事業に關して、米國資本の援助を希望することは、最も切實であります。「ブラウダ」が罵倒したのはそこであります。

然し乍ら、産業的未開國である支那が、その建設事業に、米國の資本力と機械力を欲するのは當然すぎるほど當然と云はねばなりません。

民國二十年（昭和六年）の春には、財政部長宋子文が、米國實業考察專使として、紐育へ大借款交渉に出かけるのであります。如何なる收穫があるかどうか、日本は支那とともに彼の行動を注視する必要があります。

米國資本家は今迄、寧ろ、支那に對する投資を躊躇する傾向がありました。それは彼等が支那に對して無關心だつたからではありません。

その富源といひ、その人口といひ、原料産地としても、消費市場としても、支那はまさに

米國資本開垂涎の地であります。しかも、彼等の經濟的進出に對する唯一の障害は、あの間斷のない國內戦争でありました。及び經濟的道德に欠けた軍閥政府に對する不信用でありました。

故に一九二九年末の支那の對米借款は、擔保確實五千七百萬圓、擔保不確實七千四百四十萬圓で、對日借款の擔保確實一億七千七百三十三萬圓、擔保不確實五億八千五百五十五萬圓、對英借款の計四億二千七百六十八萬圓に比べると、級が違つて居ります。

然し乍ら、國民黨政府の政治的統一事業の完成は、米國資本の支那に對する積極的活動を誘發せずには指きません。そして、早くも既にその前衛的行動は開始せられて居るのであります。一九二九年（昭和四年）、米國の二大モーター會社、「ゼネラル・モーターズ」と「フォード」は、轡を並べて滿洲へ進出して來ました。「ナショナル・シチイ銀行」も滿洲へ金融資本の陣營を進め、スタンダード石油會社も、獨專の手を支那全土に延ばさうとして居ります。

一九二九年九月十日の「ブラウダ」紙は、「太平洋に於ける米國の任務は、日本を抑壓して、支那を米帝國主義の殖民地にすることである」と直言しました。

支那の理論家中、一番頭の良い點で敬服する李人傑君も、名著「中國無産階級運動」で、「中國は國際資本主義の共同殖民地であり、且つその最後の殖民地である」と痛歎して居ります。正しくその通りであります。

そして國民政府は、それ位のことは、十分承知の上で、米國に資本の投下を要求して居るのであります。由來支那の革命家や政治家は大抵マキアベリズムの實行者であります。國民政府の諸君と雖も、亦その例に洩れません。

彼等は當面の攻撃目標として、第一に日本、第二に露西亞及び英國を有して居ります。彼等は、この當面の敵を追拂ふ爲めに、第三國たる米國をして活動させようとして居るのであります。

米國の經濟的帝國主義に對して支那が戦端を開くのは、少なくとも四半世紀乃至半世紀の

後であります。今は先づ彼の資本力と、海軍力を利用して、日本の勢力を掃蕩しなければならぬ。——これが支那國民黨諸君のお考へであります。

重工業國アメリカの戦争能力

今日の米國が、所謂資本的帝國主義時代に入つて居ることは、何人と雖も否定するものはありません。帝國主義の米國は今や資源と市場の獨占慾に驅られて、國內に於いては大トラストを結成し、國外に對しては金融的支配と攻勢的な貿易戦を行ひつゝあります。

米國の産業的實力は、全く世界のナンバー・ワンでありまして The Statesmans Yearbook 1930によりますと、農業に於いても、小麥(九億二百七十五萬ブツシエル)燕麥(十四億四千九百五十三萬ブツシエル)玉蜀黍(二十八億三千六百萬ブツシエル)等の主要作物は、遙かに露西亞、加奈陀等の農業國を壓倒する生産高を示し、棉花の生産も一千四百四十七萬七千八百七十五根に上つて、次位の印度四百七十一萬根に對して、約三倍といふすばらしさであります。

ります。

牧畜を見ましても、牛は五千七百九十六萬七千頭で印度の次位。豚に於いては(支那の統計が出来て居りませんが)五千二百六十萬頭で世界一であります。

羊も四千八百九十一萬三千頭あつて、世界の綿羊國たる濠洲の次位を占めて居ります。

馬も千九百八十三萬頭以上を有して、トップを切つて居ります。

更に鑛業に至つては、石炭は世界の總産額十二億六千八百八十萬佛噸中、五億四千六百十二萬佛噸、銅は百七十一萬佛噸中、八十四萬八千佛噸、鉄鐵は九千七百七十萬佛噸中、四千二百九十六萬佛噸、鑛鐵は一億一千八百三十萬佛噸中、五千五百三萬佛噸といふ驚異的數字を示して居るのであります。

電氣とともに、二十世紀文明の原動力といはれる石油は、十億六百萬樽(四十二ガロン樽)を生産して、實に世界産額の三分の二を占めて居ります。この驚く可き石油の汎濫があればこそ、年製作額五百三十三萬臺といふ自動車工業も成立するのであります。

一九二七年と云へば、米國が空前の投機時代に入りかけた時であります。The Statesmans Yearbookの三十年版に現はれた、一九二七年度の米國工業の生産額は、實に六百二十七億一千八百三十五萬弗に達しました。

しかもその中でも重工業が非常な勢ひを見せて居るのでありまして、

製鐵	六・一九九・二五二千弗
金屬	二・六六八・六九七千弗
機械	五・三六八・〇一五千弗
運輸機械	四・六九三・九七二千弗
鐵道材料	一・二八九・六九三千弗

といふ堂々たる數字は、人をして超弩級戰艦の横陣隊形を見るやうな、一種の亢奮に誘はすには置きません。

これに、

化學工業	三・四五七・四二七千弗
石油石炭	三・〇六〇・二二六千弗
護謨	一・二二五・〇七七千弗

等を加へますと、米國の工業は、重工業を中心とする、甚だ戰闘的な性質を持つたものであることが明らかにされます。

重工業が何故に戰闘的かと申しますと、近代的戰爭の出来る國家は、重工業國家に限られて居るからであります。

近代戰爭が鐵と石油と化學工業との戰爭であることは、今更申す迄ありません。この三要素に欠けて居る國家は、到底深刻な現代戰爭に耐えることは出来ないであります。

六十年前の普佛戰爭は、ナポレオン兵衛の影響を受けて、砲兵が非常に活動した戰爭でありました。彼等は「戰線の女王」Queen on Frontとよばれて、兩軍とも華々しい戦績を見せました。

しかし、二年に渉るその戦争期間を通じて、獨逸砲兵が發射した彈丸は、わづか八十萬封度に過ぎなかつたのであります。

歐洲大戰の第二年、大正四年の五月、カルパシヤ山脈を越えて洪牙利の平原に殺到しようとした露西亞軍を、獨逸のマツケンゼン軍は、クラカウ市外ニード河畔に邀撃して、これを遺走させました。このニード河會戰三日間の彈藥使用量は、實に百萬封度を超過して居たのであります。即ち普佛戦争は、鐵の使用量に於いて、ニード河會戰よりも劣つて居るのであります。僅々半世紀の間に、如何に戦争の性質が變つて來て居るかは、これを以てしても伺はれるでありませう。況んや西部戦線に於ける彈丸の浪費に至りましては休戰直前、瑞西國境バーゼルから白耳義のオステンド海岸に至るまで、鐵壁の如く砲兵陣地が續いて居つたといふ一事で、およそ想像に難くありません。

又、歐洲戰の末期には、瓦斯兵器が戦線の一大要素になりました。毒瓦斯の使用は條約で禁ぜられては居りますけれども、Gas warfareといふことは、最早どうしても避け難い未來の戦争形式であります。更に現代海軍の原動力が、石炭から石油に移つて來たことは、今更喋々するまでもありません。

米國はこの三つの戦争資源を殆んど完全に把持して居ります。そこへ行くと我が日本の如きは、鐵に於いては支那を管制し、石油に於いては北樺太油田、滿洲オイル・セールの開發等をやつて、漸く作戦的要求を満たすことが出來るといふ状態であります。

昭和四年度の鐵産額、鉄鐵百七十五萬佛噸、鋼鐵二百十萬佛噸といふ數字は、佛蘭西の約二十パーセント、米國の約五パーセントにしか當らないのであります。

石油産額は昭和四年度百九十四萬四千樽（四十二ガロン樽）で、米國の約〇・二パーセントといふ貧弱極まる状態であります。故に平時に於いても、米國と蘭領東印度諸島から約四千五百萬圓程度の重油と揮發油を輸入しなければなりません。

こんな有様でありますから、若し日本が、もつと米國と地理的に近接して居つて、歐洲戰

のやうな大規模な陸戦をやらなければならぬのでありましたら、遺憾ながら我々は明らかに敗勢に置かれるのであります。

しかし幸ひにして、日米支戦争の場合には、比律賓攻畧戦を除くと、我が陸軍の敵は支那軍でありますから、大規模の機械戦は豫想せられません。それから海軍は又、軍備の性質上戦列部隊を戦時急速に擴張することは困難でありますから、畧々平時兵力で闘ふこととなります。それで、我國は資源の不足を歎しながらも、辛うじて戦争は出来るのであります。

こんな譯で、兎に角戦争資源の上から申しますと、米國は世界で最も戦争能力を持つて居る國家であります。

しかも重工業國家は、原則として必然的に戦争を希望します。少なくとも戦争を忌避することはありません。歐洲戦前、獨逸のクルツプ、英國のアームストロング、ヴィカース、佛蘭西のシュナイダー等の兵器製造會社が、如何に戦争を希望して居つたかは、蔽ひ隠すことの出来ぬ事實であります。勿論、兵器製造會社は少し極端な例であります。が、製鐵、石油、

石炭、機械製造、航空機、自動車製造、化學工業、護謨等の事業會社が、何等かの程度で戦争を望んで居ることは事實であります。

殊に米國の各會社は、自國の戦敗を信じないのでありますから、一層強い熱意を持つて居ります。

一九二二年(大正十一年)ワシントン會議の直後、シンクレヤー石油會社と、内務卿フォー、海軍卿デンビー等が相結んで、太平洋岸の戦畧地點に大重油槽を建設すべく活動し、度を過して遂に油田疑獄を惹起したことは、隠れもない事實であります。

今日の米國の如く金融資本の支配的地位が確立し、(モルガン系銀行を中心とする金融業者が、如何に恐る可き勢力を本國及び外國に對して持つて居るかは恐らくは諸君の想像以上であります。)又、各産業に涉つてトラスト、シンチケート等の組織が完備して、商品の生産及び販賣が大事業家に獨占されて來ますと、その對外政策は必然的に侵畧的ならざるを得ません。そして彼等の侵畧的政策は、經濟好況時代に於いても、不況時代に於いても變ること

はないのであります。

否、不況時代に於いて、却つて激化し易い傾向を持つて居ります。一九二九年の株式崩落不況襲來後の米國が、如何に好戦心理に支配されて居るかは、一九三〇年五月から六月へかけて開かれた、上院ロンドン海軍條約審査會の記録 Hearings before the Committee on Naval (Foreign) Affairs United States Senate を見れば、明らかであります。

リードや、ロビンソンや、スワンソンや、スチムソンや、アダムス等の米國政界の巨頭が、堂々と、且つ露骨に、西太平洋戦争、即ち日本攻撃戦の可能か不可能かに就いて、激烈な論戦をやつて居るのであります。

こんな露骨な對外作戦論が行はれたことは、米國議會としても空前のことでありまして、彼等が漸く、經濟的帝國主義の煩悶期、戦争熱望期に入りかけたことを語る證據であります。

戦争熱望期に入らんとする米國

The Statesmans Yearbook 1930 によりますと、米國政府の對外債權は百十一億八千五百萬弗を越え、民間會社の對外貸付も亦百二十五億弗を突破して居ります。又、一九二九年、(昭和四年度)の外國貿易は九十六億四千一百四十萬弗で、出超八億四千一百十四萬弗といふ數字を示して居ります。

更に金準備保有高に至りますと、三十九億十六萬弗を示して、世界保有高の三十八パーセントを占めて居るのであります。まことに驚歎すべき黄金帝國の威容と申さねばなりません。しかし、この「永遠の繁榮の國」と思はれる米國にも、一抹の暗影が早くも萌したのであります。まして、一九二九年九月の株式恐慌以後、同國の經濟界は、重苦しい陣痛の呻めきを續けて居ります。

金融逼迫、供給過剩、農村購買力の減退、等といふ暗い文字が新聞の經濟面を占領し、灰色の失業者群が街頭を埋めるに至りました。

ヴァンダービルト大學のアーネスト・エバーリングは、The Downward Trend of Employ

ment 1930 に於いて、フーヴァ報告に基づき、米國失業者数を三百萬人以上と推定して居ります。無限に生産額を擴大して無限の販路を開拓するといふ、所謂フーヴァ・システムを誇るフオード會社すら、遂に生産低減をしなければならなくなりました。

世界第一の王座にあつた米國鋼鐵會社も、恐ろしい株價暴落の嵐に襲はれました。そして失業者群の増大は、共產黨の乗するところでもあります。R・ケインの The communist movement in the United States 1930 を見れば、資本主義米國の暗黒面、失業時代の共產主義運動を窺ふことが出来るであります。(又、J・オニールの American Communism 1927 を見れば、繁榮時代の共產主義運動が分ります。)

このまゝで行けば、米國の産業的將來は暗からざるを得ません。

こゝに於いて今や米國金融業者と産業トラストは、猛然として海外に對して攻勢的態度に出ようとして居ります。

彼等の墨西哥を中心とする中米政策、伯刺西爾を重點とする南米政策が、如何なる經濟的の獲得、大アマゾン河畔に於けるフオードの護謨採掘等、彼等の南米政策は甚だ大がかりであります。

しかし乍ら、あの廣漠たる南米大陸は、わづかに七千萬人足らずの人口を持つて居るに過ぎません。それでありますから、亞爾然丁、伯刺西爾、智利の三大國を合しましても、米國貨物の輸入額は四億二千七百三十萬弗(一九二九年)で、四億三千萬弗強の日本一國よりも少ないのであります。故に南米は消費市場としては、どうしても第二流の土地であります。

フーヴァ大統領は白聖館に入る前、一九二八年(昭和三年)の晩秋から翌年の一月にかけて南米を一巡しました。異常な商業的炯眼を持つ彼が、心中、南米を如何に評價したかは想像に難くありません。硝石、銅、石油、護謨等の資源としての南米の地位は重大であり、又米國を防上の戰畧的價値も見逃すことが出来ません。

しかし、要するに硝石と護謨を除けば、他は皆第二義的なもののみであります。況んや消費市場としての未來的價値は甚だ低いのでありますから、この土地を經濟的帝國主義米國の最終の目標と申すことは、どうしても出來ないのであります。

たゞこの地方に於ける英國の偉大な經濟的地位に對しては、彼等は經濟的モンロー主義の立場から、猛烈な跳躍行爲に出るであらう。

ヴェネズエラ、祕露等に於ける油田争奪戰などはそれでありませう。然し、この經濟戰は當分戰爭にはなりません。

何んとなれば、英國に戰意がなく、又英國海軍に大西洋攻勢作戰の能力がないからであります。

英米戰爭は軍事的に不可能に近い

南米に於ける經濟争闘を原因として若し英米戰爭が起つたと假定しますと、戰爭原因から

考へましても、英國海軍が攻勢的態度に出なければならぬのであります。

しかし、英國の主力艦は航續力が甚だ貧弱でありまして、到底大西洋の渡洋作戰をやることは出來ないのであります。よしんば、今後大改装でもやつて航續力が出來ましたところで英國艦隊の渡洋作戰は敗勢歴然たるものです。英軍と同等の機械力を持つ米國艦隊が、ハンプトン・ローズ軍港を根據地として、ボストン方面とヴァージン諸島に前進基點を置きまし

たならば、二千數百哩の遠航に疲れた英國艦隊は、敵軍が管制する海面で、最も不利な戰闘をやらなければならぬのであります。

殊にそんな近海戰では、米國軍は陸上航空隊が使用出来るのでありますから、制空權の争奪も米國の勝利に歸するであらう。又「ネルソン」「ロードネー」の二艦を除くと、英國主力艦十三隻は舷側防禦力が薄弱でありますから、若し空中戰に敗れでもしましたら大變であります。空中から彈着觀測をやる米國戰列艦の集中射撃に、三萬噸に足らぬ「バーラム」型の英艦が、どこまで耐えられるか、甚だ憐れなものであります。

現に米國の海軍作戦部では、立派な大西洋作戦計畫を立案しまして、エペリー提督などは「英國艦隊が若し西印度諸島方面に現はれたならば、ヴァージン諸島の北東五百哩のところまで進破して見せる」Hearings before the Committee on Naval Affairs 等と豪語して居るのであります。

又若し英國の主力が出動しなければ、戦争は一層英國にとつて不利であります。西大西洋に米國艦隊が集中したといふことだけで、全大西洋の英國の交通線は杜絶状態に陥らなければなりません。「ペンサコラ」級の米國巡洋艦が、南大西洋海面で貿易破壊戦をやりましたならば、英國は全く生命線を壓へられることになつてしまひます。

一九三〇年五月の「海軍協會雜誌」U.S. Naval Institute Proceedings に載つたパーシバル大尉の名論文「巡洋艦論」The Cruiser Problem には、米國巡洋艦の戦時使用方法が暗示的に書かれてあつて、氣味の悪い警告を英國に與へて居ります。

本國に戦争資源を持つ米國と、海上交通線によつて國家的生命を持つ英國とが、互に貿易破壊戦を始めるとすれば、どちらが困るかといふ位のことには、小學生にでも分るであります。

英國のケンオーシー少佐はその著「海洋の自由」Freedom of the Seas の中で、十二吋砲を有する英國潜水艦が紐育、ボストン等を砲撃するであらうなどと申して居りますが、そんなことは、戦争の大局に何等影響はいたしません。そして十二吋砲を積む英國潜水艦と云へば、「M三號」のことでありませうが、同艦は成績不良で、やがて廢艦になるべき運命にあります。

若し英國が米國の都市攻撃をやるつもりなら、潜水艦などでやるよりは「グロリヤス」「カアレヂアス」級の二萬噸型航空母艦で強襲するのが一番であります。

又、英米戦争に於ける潜水艦の活動と云ふのなら、米國V型巡洋潜水艦が、英國近海に機雷敷設作業をやる方が影響が大きいのであります。

要するに英米戦争は、戦畧的地位から見ても、海軍の機械力から考へても、非常に英國が

不利であります。又、事實今日の英國海軍の作戰計畫は、攻勢的といふよりは、寧ろ非常に防禦的なものであります。その演習を見ても、本國海面の小攻防戦に過ぎません。ヂエツトランドの勇將であり、英國海軍の英雄であるビイチャー元帥が、千九百三十年七月一日の上院で「英國海軍は米國海軍を目標として居ない」と論じたのは、外交的な反語と見るよりは、寧ろ軍人らしい卒直な告白として聞く可きであります。

私はロンドン海軍條約審議の英國下院の議事聽書を読んで、そとろに英國に於ける戦意の衰退を感じずには居られませんでした。英國は最早昔のやうに海軍及び海上權に對する熱情を持つて居りません。マクドナルド、ランバート、ハミルトン、レニー・スミス、アレキサンダー等の勞働黨、自由黨の諸君の所論を聞けば、彼等の心理が如何に海軍を離れつゝあるかと明瞭に看取出來ます。

英國の經濟状態は最早建艦競争に耐えられないと彼等は云ひます。大海軍は國家の過重な負擔だと彼等は申します。そして光榮あるホワイト・エンサインの軍艦旗は、一旅二旅と曳下されるのであります。軍艦旗の曳下は即ち英國商權の後退であります。勿論、世界には白耳義や和蘭のやうに、海軍力の貧弱な貿易國もあります。しかし英國に關する限り、海軍力の衰退は必ず國家を經濟的悲境に導くであります。

半生を海軍と國家財政との爲めに投じ來つた保守黨の領袖ウインストン・チャーチルだけは、追に「ロンドン海軍條約」による英國海軍の戦畧的危險を指摘して、大いに痛憤して居ります。彼は米國の新八吋巡洋艦隊を貿易破壞艦だと非難し、商船隊を護送する英國の六吋巡洋艦は彼女等の巨砲の爲めに撃破せられるだらう。しかもその六吋巡洋艦すら不足を告げ、英國海軍は食料輸入の任務を果すことが出來なくなるであらう、と警告して居るのであります。

しかし乍ら、チャーチルが如何に憤慨して見ましたところで、英國は資本的帝國主義國家として、もう米國のやうな旺盛な意思力は持つて居りません。又、戦畧的地位から考へましても、米國に對してはほとんど攻勢不可能であり、佛蘭西に對しても、その優勢な空軍と潜

水艦隊から、不斷の脅威を受けなければならなくなつて居るのであります。

故に若し英國が、米國との經濟争闘に勝利を獲ようと熱望するのであれば、舊友日本と握手することが、たゞ一つの残された手段であります。日英聯合の海軍力は、近世兵學の權威クラゼウイツ大將の持論たる百五十パーセント必勝率の公式（敵の兵力十に對する十五の兵力を持たなければ、原則として攻勢に出られないといふ定理）に適合する艦隊でありまして、よく、米國の帝國主義的政策を牽制することが出来るのであります。

しかし、運命の神から見離された英國は、日本に對する作戰の基點とより考へることの出來ぬ新嘉坡軍港を築造し、ビーチー元帥の如きも、一九三〇年七月一日の上院で、「この根據地がなければ極東に於ける英國の地位は絶望的 helplesだ」と申して居るのであります。これは恐らく、南米に於ける米國との争覇戦よりは、支那中南部に於ける日本との經濟競争を重大視する結果でありませう。（但しビーチー元帥は米國の大資本家マーシャル・ファイルドの娘婿でありますから、とんだ敵本主義を發揮して居るのだと、悪口を云へば云ふことも

出來ませう。）然しそれにしても、今日、日本と對抗することは、英國の國家政策として下の下策であります。米國と協同して西太平洋及び極東大陸に於ける日本の勢力を驅逐して見たところで、残るものは、たゞ米國との一層深刻なる争闘でありませう。その時には、前に申しましたやうな理由で、英國には必敗の運命があるのみです。これに反して日本を協同作戰國として置けば、或ひは米國とどこまでも經濟争闘を續けることが出來て、その結果英帝國の崩壊が、半世紀も、それ以上も延ばされるかも知りませぬ。

然し乍ら要するに英國は、最早帝國主義國家として、十九世紀時代のやうな強靱な意思力を持つて居りませぬ。彼等の國家政策は、今後恐らく「如何に退却戦を爲すべきか」といふ一點に集中されるのでありませう。

支那に於いても、南米に於いても、英國の商權は、時々小反撥を繰返しながら、次第々々に衰退の一路を辿るのみでありませう。

かくて、米國海軍の作戰目標は英國海軍ではなく、又、彼等は英國との戦争を希望して居

りません。一九一九年(大正八年)の夏、大西洋に遊弋して居た主力艦隊が、パナマ運河を通り過ぎて太平洋へ移動して来てから以後は、米國海軍の作戰目標は、日本海軍が中心となつて居るのであります。

又、漸く自國の經濟的未來に不安を感じかけた米國資本家が、第一に着目して居る新資源新市場は、南米大陸ではなく、寧ろ千八百八萬平方キロの廣袤と、四億五千萬の大消費者を持つ經濟的未開地、支那大陸であります。

米國支那政策の第一期

支那に對する米國の經濟的侵畧方針を語る前に、その傳統的國策、民族國家としての行動方向を一瞥することが必要であります。

米國三百年の歴史は或意味に於いて民族の西部移住史であります。その領地擴張 Territorial Expansion の跡が、直ちに彼等の西進行動 The Westward Movement を語つて居ります。

十九世紀以前に於いては、新大陸の開拓者は、常に邊境生活を送つて、森林の伐採及び先住インヂアン族との争闘を續けながら、西へ西へと進んで居りました。十九世紀初期のルイヂャナ大開拓も、幌馬車群の西進行動によつて、なされたのであります。千八百三十六年にはサム・ヒューストン將軍が墨西哥大統領サンタアナを破つて、テキサス共和國を建設いたしました。千八百四十七年にはテキサスと墨西哥との境界に關する紛争が起つて遂に米墨戦争となり、米將ウインフィールド・スコットは、天才的な戰術をもつて墨西哥首府を占領し、遂にニュー・メキシコ、アリゾナ、カリフォルニアの五十二萬二千方哩を獲たのであります。この頃の米國史は全く邊境開拓者の生々とした侵畧的争闘、占領の歴史であります。しかし、牧畜と農業を經濟の中心としたこの時代の米國も、大陸横斷鐵道の開通とともに次第に變化して、商業國家、工業國家としての成長を遂げて行きました。そして十九世紀末には、最早立派な資本主義國家であつたのであります。一九〇一年(明治三十四年)イリノイ湖畔パツファローで一無政府主義者の爲めに暗殺された帝國主義大統領マツキンレーは、こ

の時代の米國を代表するのに最もふさはしい人物でありました。

彼は砂糖と珈琲の島キューバを狙つてゐましたが、一八九八年（明治三十一年）遂に軍艦「メイン」號の原因不明の爆沈を理由として、西班牙に挑戦し、戦勝の結果、この島に對する經濟的支配權を確立したのであります。更にデユエー中將の亞細亞艦隊は、比律賓の西班牙艦隊を撃滅して、マニラ灣頭に星條旗を掲げました。かくて將來に於ける護謨の生産地が彼等の手に入り、且つ東洋政策の一大基點がこゝに築かれたのであります。

太平洋の孤島布哇も、又彼によつて米國に併合せられました。まことに彼は初期資本主義米國の攻勢的精神を具現した男であつたのであります。

彼に續いて大統領になつたルーズヴェルトは、大海軍黨の鼻祖として、太平洋重視論者として、これ亦我々の忘れることの出来ない人物であります。

しかし、十九世紀末から二十世紀初期にかけて、歐洲列國が行つた露骨極まる武斷的東洋政策を追想いたしますと、米國の侵略方法は幾分文明的、商業的でありました。

マツキンレー如何に武斷派なりとは云へ、露西亞のツアールや、獨逸のカイザーには及びません。太平洋の諸島を掠め去つた米國は、支那大陸に對しては手段を變へて、純然たる經濟的方法を用ひようといはしました。即ち門戶開放政策 Open door policy の名で知られて居る方法であります。當時滿洲に於ける露西亞帝國の大侵略、獨逸の山東獨占、香港威海衛に翻るユニオン・ヂヤツク等を見ました時に、誰しも支那に對する米國の政策としては、自由競争を唱へることが最も有利だと考へたでありませう。國務長官ジョン・ヘイは、一八九九年（明治三十二年）九月六日、列國に對して支那の門戶開放を提唱した通牒を發しました。しかし乍らこの門戶開放政策は、列國の政治的勢力範圍を否定しようとしたものではありません。たゞ列國の特殊勢力範圍内に於いても、米國が通商航行上の均等待遇を受けることを要求したに過ぎないのであります。我國に於ける米國黨の諸君は、これを米國の平和政策と申して居ります。しかし乍ら、既に東洋貿易の基點として比律賓を獲た以上は、支那に對して更に政治的侵略を行ふことは却つて不利であります。新興商工業國家として實業黨た

る共和黨の政治下にあつた當時の米國が、門戶開放主義を唱へて列國の勢力範圍に喰ひ込まうとしたのは、寧ろ今日の經濟的侵略の前衛戦だつたと見るべきでありませう。○ピアードの「米國文明の發展」The Rise of American Civilization は、米國の東洋政策を知る上に絶好の参考書であります。

彼によると、米國の支那政策が、如何に經濟的侵略意思によつて動いて居るものであるかがよく分ります。ピアードは「日露戦争當時に於ける米國の東洋外交は、露西亞の滿洲侵入に對する反對政策が中心であつた」と云ひ、「ルーズヴェルト政府が日本を支持したのは、滿洲の資源が露西亞及び露西亞の經濟的支援者たる佛蘭西に獨占されるのを、默視出来なかつたからだ」と指摘して居ります。

まことに當を得た觀察でありまして、日露戦争後、日本が大陸に對する經營を開始するとともに、米國に於いて排日本の傾向が猛然として起つて來た理由も、これでよく諒解出来るであります。

日本が眞に大陸經營を始めたのは日露戦争後であります。そして偶然にも米國の東洋に對する經濟侵略政策が、やゝ具體的に現はれかけたのも、その前後なのであります。彼等の滿洲に對する侵略意思は、一九〇五年(明治三十八年)の鐵道王ハリマンの滿鐵買収策によつて火蓋を切りました。しかし乍らピアードも申して居ります如く「日本は生命を賭して獲た滿洲を、米國實業家に横奪されてもよいといふ意思は少しも持つて居なかつた」(The Rise of American Civilization) のであります。

社會主義者スコット・ニアリングは、その名著「黄金外交」Dollar Diplomacy で、滿洲に對する米國の政策を小氣味良く暴露して居ります。一九〇七年(明治四十年)の新民屯、齊齊哈爾鐵道借款といひ、一九〇九年(明治四十二年)の錦瑗鐵道契約といひ、悉く經濟侵略意思の現れでないものはありません。大統領タフトの時代に至りまして、彼等はいよいよ弗外交の本領を發揮し、國務長官ノックスの、傍若無人な滿洲鐵道中立提議となつたのであります。

米國の經濟政策第二段階に入る

しかし乍ら背後に優勢な軍備を持たぬ經濟政策が、眞に帝國主義的威力を發揮することは困難であります。鋭敏な資本家及び政治家の先驅的行動はありましたが、東洋に於ける米國の經濟的地位は、十年前までは未だ大したものでもなかつたのであります。しかし、最近に至つて彼等の經濟的進出は非常な勢ひを持つて來ました。

一九二八年(昭和三年)の支那貿易に於ける、米國の地位は左の如きものであります。

	對支輸入	對支輸出
日本	二八一・七一四千海關兩	三三五・四二一千海關兩
香港	一八五・八〇五 同	二二六・〇七七 同
米國	一二八・一七〇 同	二〇五・五五一 同
英國	六一・六九五 同	一一三・七五六 同

未だ王者の威を唱へるには少し遠慮であります。けれども、日本と英國の牙城に迫るその數字的勢力は、年々ぐんぐんと昇つて來て居るのであります。一九二七年と二八年とは、既に約四千萬兩の輸出増加を示して居る有様であります。

一九二二年のワシントン會議と一九三〇年のロンドン會議は、米國海軍の威力を、外交手段をもつて増大させた會議であります。この海軍力を背景として、米國の經濟政策は、初め東洋に對する積極的行進に移ることが出来るであります。弗外交は大海軍に支持されてこそ、眞にその特色を發揮することが出来るのであります。門戸開放政策も海軍力をもつて強要しなければ、眞に徹底することは出来ません。一九〇〇年代初期に於ける米國資本家の東洋進出が失敗に歸したのも、帝國主義政策の基幹たるべき兵力を缺いで居つたからであります。

今や堂々たる合衆國艦隊 U.S. Fleet を有する資本帝國主義米國が、支那に對して如何なる行動を開始したかを注視する必要があるあります。

スタンダード石油トラスト、フォード自動車、ゼネラルモーターズ等は、着々として石油槽の建設に、過剰自動車の濫賣に、その鐵鐵の手を伸ばしつゝあります。國民政府の道路政策と、米國自動車會社、石油會社とがどんな關係で結ばれて居るかは申す迄もありません。

昭和四年、プリンストン大學のケメラ博士の支那經濟調査會は、米國の國策としての對支經濟進出策を、實地探査をやつて研究しました。博士が國民政府及び米國商務省に對して相當の收獲を齎したことは想像に難くありません。

更に注目しなければならぬことは、空中運輸事業に對する米國資本の獨占行爲であります。昭和四年四月、國民政府の經營する中國々民航空公司は、米國のエビエーション・エキスプロレーションと郵便空輸契約をいたしました。そして、上海から南京を経て漢口に至る線と、南京から濟南を通過して天津、北平に至る線と、漢口から廣東に至る線と、空中の重要幹線は、ことごとく米國航空會社の手に握られることになつたのであります。更に將來は

北平から奉天を経て哈爾濱に至る滿洲の空にも、米國機の銀翼が白く輝くのを見るであります。

無線電信事業に於いても、我が三井はフェデラルに敗れつゝあります。

ナショナル・シティ銀行を主力とする金融資本の進入も、そろ／＼開始せられ、奉天の張學良すら、黑龍江省の鑛業權を擔保に投げ出して、弗の供給をモルガン系銀行に仰がうとして居ります。

前にも申しましたやうに支那は、米國の金融資本家、自動車、飛行機、機械製造其他の重工業者にとつて、世界に残された唯一の好餌であります。唯一の將來市場であります。

永遠の榮榮を夢見たフーズアの經濟政策が破れて、幻滅の悲哀を感じつゝある今日の米國資本が、支那市場開拓に力を傾倒して來るのは必然の理數であります。

エール大學のC・ハウランドはその大著「米國外交關係の調査」Survey of American Foreign Relations 1929 に於いて、盛んに支那の市場價値を力説して居ります。そして米國

の經濟政策としては、支那の消費量を増大さす爲めに、極力國民政府の開發建設事業を支援するであります。これは亦國民政府が最も切實に要求して居るところでありますから、米國と支那との關係は、今後一種の經濟同盟に迄進む可能性があるのであります。現に國民政府の政策は、米國式組織で行はれようとして居ります。今日の國民政府の部内には、如何に多くの米人専門家が入りこんで居ることでしょうか。

豫算のクリーヴランド、租税のロツクハート、鐵道のポーランド、貿易のファイリー、數へ来れば三十名にも達するであります。更にナショナル・シティ銀行のリンチや、排日家のミラードが支那の經濟參謀本部にあつて排日作戰をめぐらして居ることを思ふと、將來に於ける經濟争鬭の深刻さが想ひやられるのであります。滿鐵を包圍攻撃しようとする支那の滿蒙鐵道政策は、果して何人の指令に動かされた結果でありませうか。東支鐵道の回收争鬭も炯眼なソヴェートのブラウグ紙は、米國資本閥の策動であると指摘して居ります。

今や支那に於ける門戶開放政策は、米國の國策 National policy であります。そして今日の門戶開放政策は一九〇〇年の門戶開放主義とは性質が違ひ、企業と市場を獨占しようとする、深刻きはまる帝國主義的政策であることを知らねばなりません。

ロンドン海軍會議の勝利を轉機としまして、米國は支那との經濟協同作戰に出で、日本を驅逐しようとするのであります。そしてその經濟戰は、遂に關東州及び滿鐵の回收を争點とする政治抗争に至らねば、止まることの出來ぬ運命を持つて居ります。

恐らく米國は最後迄日本との政治的争鬭を避けるでありません。しかし日支の抗争が極點に達しました時には、その假面をかなぐり捨て、帝國主義國家の本體を暴露するであります。

スコット・ニアリングは「黄金外交」Dollar Diplomacy で「米國の外交政策は一瞬時

も、國家の目的と要求を見失つて居らぬ」と申しました。
今の日本が若し、支那に對する米國の意思を、從來のやうな薄弱なものだと考へて居ると
しますれば、それは非常な錯覺であります。

大統領フーヴァは、一九三〇年七月二十二日、白宮で「ロンドン海軍條約」批准書に署名した後、何かが咎めたのか「ロンドン條約は米國の完全な國防 full defense を保證したが、それとともに、世界の人心から、我國が帝國主義的侵略を企圖して居る Our country aimed at imperialistic exploitation」といふ誤解を除き去るものと信ずる」と聲明いたしました。随分人を喰つた聲明であります。米國の「完全な國防」full defense が「帝國主義的侵略」Imperialistic exploitation の前提である位のことには中學生諸君と雖も看破するではありません。然し、我國の新聞は、その時自國の海軍に對する攻撃に没頭して居つて、フーヴァのこの意味深長な「攻勢の豫告」を聞き洩してしまつたのであります。

新聞ばかりではありません。政府も實業家も、米國の外交政策が、今後如何なる方面にその砲口を向けるかに就いて殆んど盲目でありました。たゞ海軍だけが、獨り非常に敏感でありましたのは、周到且つ深刻な米國海軍の太平洋作戦を研究して居つた結果であります。

米國海軍の戦争能力

帝國主義の遂行機關

スコット・ニアリングは、The Dollar Diplomacy の中で「米國の外交と國策とは一瞬時も離れることがない」と申しましたが、彼等の海軍も亦さうであります。米國は何も虚榮のために年経費三億五千萬弗の大海軍を持つて居るではありません。

桑港金門灣を中心として、兩大洋に遊弋するあの龐大な艦隊は、たゞ國策遂行のために、即ち經濟的帝國主義の目的を達成する手段として存在して居るのであります。一九二八年（昭和三年）十月六日、海軍卿カーチス・ウイルバーの名をもつて發表された「米國海軍政策」(United States Naval Policy) には、「米國海軍は國家の政策と通商を支持し、本國及び

海外領土の防禦に十分な兵力を保有しなければならぬ。」The Navy of the United States

should be maintained in sufficient strength to support its policies and its commerce, and to guard its continental and overseas possessions と嚴肅に宣言してあります。この宣言は米國海軍の「根本政策」Fundamental policy を表明した、永遠的性質を持つたものでありまして、米國海軍の一切の政策及び作戦は、この宣言が基準になつて居るのであります。

この宣言中にある、海軍が兵力をもつて支持しなければならぬ「國家政策」とは、即ち米大陸保全のモンロー主義と、支那に對する門戸開放政策であります。そして、この二つの主義は、いづれも主として經濟的獨占(企業と金融の獨占)を意味するものであることを忘れてはなりません。

過去に於いても米國海軍がこの二大政策を遂行するために存在して居たことは、ウイルバー宣言に關係なく、儼然とした歴史的事實であります。(たゞウイルバー宣言以後、その色彩が一層強くなつたことは、彼等の經濟政策の進展を語るものとして、注意に値します。)一九〇八年(明治四十一年)、ルーズヴェルト大統領の命を享けて、瘦身提督スベリー少將が、十

六隻の戦艦艦隊を率ひ、南米ケーブ岬沖を廻つて太平洋に現はれた時、日本は初めて強く米國の戰意を感じました。その頃は丁度、ハリマン、ノックス等が滿洲に對する資本侵略を試みようとして居た時でありまして、既にこの頃から、米國の經濟政策と海軍政策とは、影と形のやうな關係にあつたのであります。更に歐洲戰爭の當時、彼等はダニエルス大海軍法を制定して、四萬噸級主力艦十六隻の建造に着手し、造船臺上に据えつけられた怪物のやうな龍骨の一群は、遙かに日本を威嚇いたしました。この大海軍法も、工業國家として躍進的進歩を遂げた、當時の米國の經濟力を反映したもので、この海軍法出現以後、彼等は明らかに武装的帝國主義の段階に入つたのであります。

一九一九年(大正八年)の八月、カリビアン海の紺碧の波を蹴つて、百數十隻の大艦隊がパナマ運河東口コロロン要港に達し、長大な一列縱陣を作つて、運河を西へ通過した時、米國海軍の太平洋作戦は初めて急迫した現實性を帯びて來ました。英國の海軍評論家ヘクター・

パイオターは、「太平洋海權論」Seapower in the Pacificの冒頭に、「獨逸の大海艦隊が降伏した一九一八年十一月二十六日をもつて海上權力史の一章は閉ぢられた。そして次の一章は一九一九年八月、新編制の米國太平洋艦隊がパナマ運河を通過して、桑港灣頭に現はれた時に初まつたのである。」と申して居ります。

それ以後の米國海軍は、すべての研究を太平洋作戦に集中しまして、今や、略々西太平洋に於いて日本海軍を撃破することの出来る計畫が成つたやうであります。

「米國海軍の目的は支那に於ける米國國策の遂行を支持することであり、且つ作戦の目標は日本海軍である。」——この命題は、ウイルバー宣言以後、艦隊に於いても、海軍兵學校に於いても、すべての士官に知らされて居ります。

「海上權」といふものゝ經濟的意義を最も明らかにした近世海軍評論家の第一人者マハン大佐は、既に千九百年に「亞細亞論」The Problem of Asiaを書き、支那政策と海軍との關係を論じました。天才の眼は常に未來を洞見する力を持つて居ります。今や米國國策の重點

は支那に置かれようとし、又、海軍の主力は太平洋に集中されて、この天才評論家の豫言を實現いたしました。

一九二四年（大正十三年）、時の作戦部長エベリーは、「モンロー主義擁護の爲めには防禦的
海軍で足るが、支那に於ける門戶開放主義を遂行するためには、どうしても大海軍でなければならぬ」Hearings 1924と議會で高言し、ニューポート海軍大學校の教頭トウツグ大佐なども一九二五年七月の「海軍協會雜誌」U.S. Naval Institute Proceedingsに、「門戶開放主義こそ我が米國の未來國策であり、且つ海軍の最終目的だ」と切言して居ります。この大佐は大戦當時驅逐艦「ワドスウォース」に乗つて、米國軍人中第一番に歐洲戰場へ乗り出した勇士で、只今は戦艦「メリーランド」の艦長として、青年士官の憧憬の的となつて居ります。

そして、この二人の意見は、單なる彼等の個人的意見ではなく、實に米國海軍士官全體の間を流れて居る思想的、主潮を代表したものであります。

更に、近頃若い大尉級の士官が、盛んに深刻な海軍政策論を發表して居ることは、見逃す

ことの出来ない現象であります。米國では大尉級の意見が相當重んぜられるのでありますし且つ頭腦明晰で研究心の旺盛なこれら下級士官こそ、米國海軍の實際的指導力でありますから、彼等の議論を無視することは許されません。中にもロベツト大尉の「海軍士官は何故米國外交政策を知らねばならぬか」 Why should the Naval Officer study American Foreign Policy? や「十字街上の海軍政策」 Naval Policy at the Crossroads などはその尤なるものでありませう。彼は後者に於いて滿洲を戦争の原因地として論じて居ります。(勿論、中米諸國及び西印度洋カリビアン海を制壓することは、パナマ運河を中心とする米國國防上、第一の要件でありますから、大尉の議論もカリビアン政策が中心になつて居ります。けれども、カリビアン作戦に意義があるのは、それが太平洋作戦の基礎工事であるからであります。) 又米國海軍切つての智能を持つ作戦部長 Chief of Operations プラット大將(前艦隊司令長官)の言葉が、「一九三〇年上院記録」 Hearings に出て居りますが、それは實に次のやうな露骨極まるものであります。

「我等は百年以内に、支那のために、彼女の戦争を助けて闘はねばならぬかも知れない。」

“Before 100 years have passed we may be helping fight China's battle for her”

「百年以内」とは勿論「近き將來」といふ意味であります。プラット大將は、一九二九年の九月に「軍縮と國防」 Disarmament and the National Defense といふ論文を發表しましたが、その中にも「日本と軍縮を論議するなら、薩摩人を相手にしなければ駄目だ。何んとなれば薩摩人はリベラル・シンカー(變通思想の所有者)だから。」などとメスのやうな鋭い言葉を吐いて居ります。

ロンドン海軍會議に對する米國の作戰方略も、殆んど全權顧問だつた彼がたてたのであります。今や大將は米國海軍の中心的人物であります。

我々は日露戦争の前に、クロボトキンや、マカロフの名に對して抱いたのと同じ感情を、このアメリカ帝國主義の執行者に對して抱かない譯には参りません。

米國海軍の強行的戦法

私は今や米國海軍の作戦を語らねばならなくなりました。そして彼等の作戦計畫が明らか
にさへなれば、帝國主義米國の對支經濟政策が、今後如何に轉向して行くか、ほど推察せら
れると思ふのであります。今日の時代に蒙古匈奴の歐洲遠征のやうな、單なる征服慾に驅ら
れた武力侵略などのあらう筈はありません。海上作戦 Operations の裏には、經濟國策
Policies の大きな影が潜んで居ります。米國海軍の海上作戦の眞劍性は、とりもなほさず、
その國家の經濟政策の深刻性を語るものであることを知らねばなりません。

さて、米國海軍の政策、作戦大綱は、前に申しました「米國海軍政策」D. S. N. P. の十二
根本政策中の A、B、C、D、E に明示されて居ります。面倒ですが重大な文献であります
から全文を引用いたします。

A 「世界第一位で、海軍を備制限條約の主力艦比率」(米、英、日、五、五、三)

に準ずる海軍を、建設し、維持し、運用する。」

To create, maintain, and operate a navy second to none, and in conformity with the
ratios for capital ships established by the treaty for limitation of naval armaments.

B 「戦闘能力の増大を全訓練の目的として、平時に於いても斷えずその能力を維持する。」

To make war efficiency the object of all training, and to maintain that efficiency
during the entire period of peace.

C 「海軍を兩大洋のどちらの作戦にも應ずることが出来るやうに、擴張編制する。」

To develop and organize the navy for operation in any part of either ocean.

D 「戦闘に對する海軍力を第一義とする。」

To make strength of the navy for battle of primary importance.

E 「大洋に於ける經濟的危機の保護に對する海軍力を第二義とする。」

To make strength of the navy for exercising ocean-wide economic pressure next in impor-

-tance.

卒然と見たゞけでは一寸分りませんが、以上の中Aを作戦的見地から申しますと、「英國海軍に對しては十割の兵力を以て、完全な防禦作戰を執り、日本海軍に對しては十五割の必勝比率を保つて、何時でも攻勢作戰に出られるやうに準備しなければならぬ」といふ意味になります。攻勢軍が十五割の兵力を持たねばならぬといふのは、近世兵學上の定理であります。獨逸のクラゼウイツ大將が「ナポレオンでもドレスデンの一戦の外は劣勢で勝つたことがないぞ」と指摘してから、この定理、50% Superiority は、列國の軍事専門家の間に強く信ぜられるやうになりました。更に米國海軍では、自國のフィスク提督が熱心に主張した。N二角とN Square Lawといふ定理が信ぜられて居ります。これは砲戰を主とする近代海戰では劣勢軍は必ず敗北するといふのでありまして、十と六の砲力を持つ艦隊が戦へば、二十七分で劣勢軍は全滅し、優勢軍はその時尚八割の兵力を残すといふ計算なども出来て居ります。故に彼等が英國に對して十、日本に對して十五といふ強大な兵力を持つてパナマ運河の中

心に作戦すれば、英國海軍のカリビアン海侵入も完全に防禦出来、又日本に對する波洋作戰も敢行することが出来る譯であります。更に彼等が太平洋戰爭に於いては長期作戰よりも短期作戰を重視し、戰爭開始と共に、猛然として日本の主力に戦ひを挑むであらうことは、B、D、E、の三條に歴々として現はれて居ります。

Bは平時艦隊が直ちに戰時艦隊として活動することを豫言し、D、Eは、「米國艦隊は海上通商路の一次的危険などは顧慮せず、一氣に決戦手段に訴へるぞ」と、警告して居るものであります。

日本の海軍軍令部は、今日の米國海軍がたてゝ居るこの作戰計畫を「速戰即決の戦法」と稱んで居ります。

「短期作戰」「速戰即決」などと申しますと、何だかいたづらに突進的な爆發的な戦法のやうに思へますが、事實はさうではなくて寧ろ粘着力のある、組織的な、平押し戦法なのであります。前著「太平洋戰爭」にも少しく御紹介して置きましたが、この戦法を研究するこ

とは、太平洋戦争の勝敗を知る最も大切な鍵でありますから、再び新しくお話しすることを許していただきたいと思ひます。

経済的帝國主義の特徴は、企業と金融の獨占を熱望するところにあります。故に米國の競争目的は、支那に於ける日本資本、日本企業の驅逐であります。少なくとも、鐵道、鑛山、重機械及び大規模な紡績工業等の驅逐であります。この目的を達成する爲めには、餘程徹底的に日本を敗北させねばなりません。日本の海軍から西太平洋の管制權を奪ひ、日本の兵器工業を一時絶滅させ、且つ日本の陸軍が大陸で行動出來ぬやうにしなければ、米帝國の勝利といふことは出來ません。

それでありますから彼等が戦争する以上は、徹底的に強行攻撃の態度に出るものと思はねばなりません。

獨逸のクラゼウイツツ大將は「敵の武力はこれを撃滅しなければならぬ。敵の意思はこれを制壓しなければならぬ」と申しましたが、まことに戦争とは、敵軍敵國を壓倒して、國家

の意思を強制的に遂行するものに他なりません。

故に米國は全海軍力を擧げて、日本に決戦を挑むであります。大正八年の太平洋艦隊新編制以後、米國海軍の作戰部が最も力を注いだ研究は、「どうしたら劣勢艦隊に戦闘を強制してこれを撃滅することが出來るか」といふことであります。この研究の結果、彼等が收獲した新戦法は、「作戰線の前進」といふ方法であります。

この作戰の原理は、米國海軍の鬼才といはれるW・パイ大佐の「陸海軍協同作戰論」に明確に示されて居ります。

「戰略上攻勢をとる軍隊は、先づ前進路 (Lines of advance) 作戰線 (Lines of operations) を決めなければならぬ。そしてこの作戰線に沿うて進撃して行けば、敵は主力をもつて決戦を求めて出て來るか、又はそのまま勝利の希望を抛棄して屈服するの他はない。」

まことに堂々たる戦法であります。パイ大佐は更に「前進路を進むに當つては、敵の政治的中心地、又は重要工業地帯を襲撃占領するやうな姿勢を示さねばならぬ。」と申して居りま

す。短期作戦、速戦即決とは、このやうに開戦後直ちに一大作戦線を形成して、これを平押しに押しつけて、敵軍を壓倒しようといふ戦法なのであります。

先づこれだけのことを頭に入れて置いて頂きますと、これからお話し申します米國の新太平洋作戦が、よくお分りになるであらうと思ひます。

短期作戦は戦争の原則

米國海軍が何故短期作戦をやりたがるかと申しますと、短期作戦が戦争として最上最勝の方法だからであります。長期作戦、現代に於ける長期攻撃作戦は、経済的に非常な大負擔であります。殊に太平洋作戦の場合、米國の主力艦隊が根據地に引き込んで、巡洋艦の貿易破壊や、航空母艦の敵國空襲などの小作戦をだら／＼やつて居りますと、日本陸軍はその間に支那大陸に根を張つて、戦時資源を完全にその手に入れてしまふであります。又、たとへ日本が貿易杜絶の苦痛に耐え切れなくなつて、(米國とても同じく太平洋貿易は非常な打撃を

被りますが) 休戦の提議をしたと假定しましても、その艦隊は依然として残つて居るのでありますから、米國の戦争目的は殆んど達成することが出来ない譯であります。更に長期戦で日本が降伏するなどといふことは、先づ考へられません。何んとなれば、長期戦になりますと比律賓は必ず日本の手に落ちます。比律賓が日本軍に占領せられました時は、即ち日本の南洋貿易、歐洲貿易が廻る時であります。降伏などとは思ひもありません。それでありますから、太平洋の長期作戦は、寧ろ日本に有利な戦争方法なのであります。だから、米國が戦争目的を貫くためには、どうしても、主力を動かして西太平洋に進出しなければなりません。西太平洋に主力艦隊を持つて来て、日本艦隊を撃破しなければ、支那に於ける日本の経済的勢力を驅逐することは、到底絶望であります。

遂に頭の良い米國の作戦部は、これ位のこととはとくに知つて居りますから、今申しましたやうに、主力決戦を主とする作戦線の戦法を作つて居るのであります。

要するに長期作戦は、止むを得ざる最悪の戦争方法でありますから、極力これを避ける

のが兵の常道でありませう。長期の攻撃作戦をやれば、兵員の疲労も非常なものであります。疲労した兵を以つて、どうして強行的に敵國の意思を制壓することが出来ませう。佐藤鐵太郎中將はその著

の中で、「米國海軍の傳統的戦法は一氣猛進主義だ」と云つて居られますが、極めて周密な計畫の下に行はれる極めて冒險的な一氣猛進主義の戦法こそ、最も奏功的戦争方法と云はねばなりません。

短期作戦の要諦は、兵力を集中して、極度に軍の全機能を働かす點にあります。

歐洲大戰の初め、獨逸陸軍は美事な作戦をやりました。二十五箇軍團の主力軍が、最も抵抗力の少ない白佛國境を突破して、九箇軍團の左翼軍と共に北佛の平野に侵入した時は、確かに短期作戦の精華を發揮したものだと思はれました。然し、獨逸海軍が何故か英國陸軍の輸送線に對する攻撃を怠りましたために、遂にマルヌ河の會戦でジョツフル大將に喰ひ止められたのであります。英國陸軍はマルヌ會戦で直接餘り働いて居ないやうであります。その牽制力は、相當強く獨逸軍の戦闘力に影響を及ぼしたのであります。マルヌ河の獨逸の敗戦

は、敵ジョツフル將軍の天才的戰略にもよりますが、又彼等自身の手ぬかりであることは否めません。あの時に獨逸海軍が若し英佛海峡に對する決死的作戦に出て居つたならば、カイゼルの豪語したやうに、獨逸軍は或ひは菩提樹の葉が散るまでに、伯林に凱旋して居たかも知れないのであります。

米國海軍作戦部及びニューボルト海軍大學では、この陸戦に關して相當の研究を重ね、我等は獨軍の失敗を重ねてはならぬと、警策して居ります。彼等は又大戰中の英國艦隊の拙劣な戰略に就いて、かなり辛辣な批判をやつて居ります。

英國の大艦隊は、獨逸の大海艦隊に對して十五割以上の必勝勢力を持ち乍ら、何故にヂェットランド海戦迄殆んど二年間も、獨逸艦隊に對して決戦を強ひることが出来なかつたか。これは明らかに司令長官ゼリコー大將の無能を表明するものだ、と云ふのであります。あの場合米國海軍ならば、先づ敵の前進基點であるヘリゴランド島要港を強襲する姿勢を示すであらう。同島を占領されると、獨逸海軍は咽喉を扼されることになる。だから獨逸の

主力艦隊は、必ず占領防衛の爲めに出勤しなければならぬ。我軍はその出勤を遊撃して決戦を強ひるのだ。——これが米國海軍作戦部の英獨海戦に對する批評であります。

この意見を太平洋戦争に持つて参りますと、米國艦隊は小笠原島又は奄美大島を占領する姿勢を示して、日本艦隊をおびき出してやるぞ、と云ふことであります。パイ大佐の申して居りますやうに、東京や、其他の工業地帯に對する連続的空中攻撃は、更に有効な誘ひ出しの方法であります。

とにかく、どんなことをしても日本艦隊に避戦させぬ、といふのが、彼等の作戦の根本なのであります。然らば、彼等はどういふ方法でその作戦線を進めて来るのか、又日本艦隊に決戦を強ひて、果して勝つことが出来る自信があるのか。

それをお話する前に、私は先づ太平洋に於ける米國海軍の戦略的地形に就いて一言して置かねばなりません。

米國の戦畧的地形

我が南方の根據地比律賓とガムを別にいたしまして、米國の太平洋作戦の重要根據地は、パナマ運河地帯のバルボア、南加州のサン・ディアゴ、桑港のメーア、ビニューヅット・サウンドのプレマートン、布哇のパール港等で、不規則な大三角形を畫いて散在して居ります。パナマ運河地帯は、大西洋と太平洋を繋ぐ動脈でありますから、西口バルボア港も、東口コロン港も、重砲と高射砲と五中隊の陸軍機、九十三機編制の海兵航空隊で、最も嚴重な防禦施設が出来て居ります。運河地帯防備戦は、米國海軍がよくやる演習であります。何時も、防備軍が負けて居ります。一九二九年、一九三〇年、(昭和四、五年)の演習も、全合衆國艦隊と陸軍守備隊、海兵守備隊の聯合でやつたのであります。例によつて運河が破壊されたことになりました。

しかし、實戦の場合、八千六十哩の遠距離(最も近いマーシャル群島からでも六千五百

渾)にある同地に對して、日本海軍が強襲を行ふことは、(主力の決戦に勝つた場合を除いて)殆んど不可能であります。わづかに伊號一型潜水艦がその絶大な航續力を利用して、何等かの行動に出れば出る位のこと、我軍の運河攻撃は先づ空想に屬すると見なければなりません。

更に米國海軍のパナマ攻防演習は、實はパナマ運河地帯を日本本土と假想した演習なのであります。一九三〇年(昭和五年)度の演習などは、例の艦隊司令長官ブラット大將が思ふ存分にその獨創的戰術を發揮したものでありまして、ガラパゴス群島を占領し、更に運河前面のアズエラ半島を強襲する姿勢を示して、まんまと防禦軍をおびき出し、これを撃破し去つたのであります。

この戦法こそ、先に申上げました、米國海軍が歐洲大戰を研究した結果編み出した、新戰術に他なりません。

この運河地帯を別にいたしますと、太平洋岸に於ける米國の大根據地は、桑港を中心

としまして、北にブレマートン、南にサン・チアゴがあります。

北方根據地ブレマートンは、アラスカのシトカ港へ僅か八百哩といふ近距離にあります。アラスカ防禦上最も重要な軍港であります。又、米國の主力艦隊がその前進路 Line of

Advanceを北方にとり、アリューシャン群島の島影に沿うて進軍することになりました場合は、この軍港は補給根據地として非常な働きをします。この場合は、アラスカ半島ウナラスカの、ダッチ・ハーバーが前進根據地になります。

南方根據地サンチアゴは、オレンチの匂ひ高い常春の國南加州羅府の南にある美しい軍港であります。大航空隊があり、物々しい石油槽の一群が灰色に彩られ、低潮時水深三十五呎の港内には、水雷戰隊所屬の多數の驅逐艦が、細長い空色の艦體を並べて浮んで居ります。この港は、パナマ運河を通過して、太平洋に出て來た大西洋部隊(偵察艦隊)に對する、補給根據地であります。

最後の中央根據地の桑港こそは、實に米國艦隊の日本に對する作戰根據地になるべき

軍港であります。四箇の大船渠、大油槽、大彈藥庫、軍需品庫等の補給設備は、ゴールドン・ゲイト要塞、大航空隊等の防備施設とともに、非常に大規模な計畫の下に築造されました。大體桑港のメーア軍港は碇泊地域が狭いといふので従來大分非難があつたのでありますが、補給設備の完成は、すべての議論を一蹴してしまひました。繰返して申しますやうに、米國海軍の太平洋作戦は攻勢作戦、大艦隊が大洋を越えて行ふ進撃戦法であります。それ故に何よりも重大なのは、艦隊に對する補給設備でありまして、若しこれが不完全であれば、到底全兵力をあげてやる短期の大作戦は不可能であります。然し今や桑港築港十萬噸の繫船棧橋には、五條の送油管がありまして、絶大な燃料補給力を持つて居ります。

米國海軍省は戦時艦隊の燃料(重油)消費量を一月約五十萬噸と見積つて居ります。これ位の補給は加州油田を控へる桑港にとりまして何でもありません。一九二五年(大正十四年)の太平洋大演習で、この港の補給力は十分試験済みであります。

この桑港を作戰根據地とする米國海軍は、太平洋を二千百哩西へ進出して居る布哇群島、オアフ島のパール軍港を前進根據地とするのであります。

パール・ハーバー、その名は優しくも眞珠港とつけられて居りますが、これこそアメリカ帝國主義の前衛、鋼鐵で武装された恐ろしい怪物に他なりません。

オアフ島は全島殆んど岩礁に圍まれた要害地でありまして、四つの水道に機雷でも敷設すると、この島に對する上陸作戦は先づ不可能であります。しかし横須賀軍港から三千三百七十哩の比較的近距离にあるこの島は、日本の巡洋艦、巡洋艦、航空母艦及び潜水艦等から屢々襲撃される危険性があります。故に米國はオアフ島防備には全力を注ぎまして、シヨール・フィールド兵營にある一個師團の陸軍は、高射砲兵二聯隊、海岸砲兵二聯隊、野戰砲兵三聯隊等砲兵で固めた軍隊であります。又ウイラー・フィールド・ルーク・ライーグドには七中隊の陸軍航空隊(五三機)があり、一九三一年の夏には海軍航空機も百十二機に達し、その中五十四機は、素晴らしい破壊力を持つたPN型大型雷爆機であります。オアフ島以外ライイ、カウイ、マウイ、ハワイの諸島にも飛行基地が出来まして、航空隊によるこの島の空中

防禦は今や殆んど完全に近い状態にあります。

更に補給地としての布哇は一層恐るべきものでありまして、水深二十米、錨地八平方哩のパール港は、大艦隊の戦時泊地として申分ありません。主力艦用の大船渠や、七十萬噸の重油を貯蔵する大槽や、遺は五千萬弗の大金をかけただけあつて東洋進出戦の前進根據地として、全く遺憾ない設備であります。

さて以上の完成した大根據地によつて、米國艦隊はどういふ方法で進撃して來るのでありませうか。今から少しく彼等の艦隊編制に就いて調べて見たいと思ひます。

一九三一年の米國艦隊

既に速戦の戦法を執る以上、艦隊が平時状態から戦時状態に移る過程は、出来る限り短かくしなければなりません。大戦勃發の一九一四年の夏、獨逸參謀本部が敢行した大動員は、如何にも速戦戦法の好模範でありました。八月一日、露西亞に宣戦すると共に直ちに九個軍

團の兵をエルザス・ロートリンゲンに進めて佛蘭西に備へ、翌二日には、早くも戦時編制の二十五個軍團が、白耳義國境に集中せられて居つたのであります。短期作戦の兵力移動は、まさにかくの如くあるべきです。

「米國海軍政策」U.S. Naval Policy には、「我が海軍の平時編制は常に戦時に則り、戦時はたゞこれを擴大すれば足りるやうにする」と、編制政策の原則を示して居りますが、彼等の戦法から考へてまことに當然のことであります。

即ち、米國海軍 U.S. Navy を一丸として一司令長官 Commander in chief の指揮下に置き、これを米國艦隊 U.S. Fleet と稱して居ります。一九三一年度(昭和六年)の艦隊編制は左の通りです。

一、米國艦隊獨立旗艦 Flagship

戦艦「テキサス」

二七、〇〇〇噸 一四吋砲一〇門 二二漚

これには司令長官 J. チエーズ大將が坐乗して居ります。

二、戰艦隊 Battle Fleet

A 旗艦 ショーフィルド大將坐乗

戰艦「カリフォルニア」 三二、三〇〇噸 一四吋砲一二門 二二湮

B 第三戰艦戰隊

戰艦「ニュー・ヨーク」 二七、〇〇〇噸 一四吋砲二〇門 二二湮

ク 「ネバーダ」 二七、五〇〇噸 一四吋砲二〇門二〇・五湮

C 第四戰艦戰隊

戰艦「ニュー・メキシコ」 三二、〇〇〇噸 一四吋砲一二門 二二湮

ク 「アイダホ」 三二、〇〇〇噸 一四吋砲一二門 二二湮

ク 「ミスシツビー」 三二、〇〇〇噸 一四吋砲一二門 二二湮

D 第五戰艦戰隊

戰艦「ウエスト・ヴァージニア」三二、六〇〇噸 一六吋砲八門 二二湮

同 「メリーランド」 三二、六〇〇噸 一六吋砲八門 二二湮

同 「コロラド」 三二、六〇〇噸 一六吋砲八門 二二湮

以上の超弩級戰艦十隻は、まさに米國艦隊の中心的戰闘力であります。主力艦は「時代後れ」Okechewaだ、などといふ人がありますが、十六吋、十四吋等の巨砲の前に立つて、果して破壊されざる何物かであるでせうか、強烈な大破壊力を持つ主力艦は、依然として海戰の決定的要素であります。

新銳の一萬噸巡洋艦が、如何にその八吋砲を振り立て、見ましたところで、十吋以上の装甲板を有する戰艦を、どうすることが出来ませう。航空機の爆撃、雷撃に對しても、最大の抵抗力を持つものは戰艦であります。絶大な破壊力と重々しい防禦力！主力艦は永遠に海上の王者であります。故に米國の作戰部は、太平洋作戰の重點を、どこまでも主力艦隊の決戦に置かうとして居ります。今や一艦約一千萬弗の改装費を投じて、各艦とも砲の仰角を増加して射程を遠くし、燃油装置を改めて航続力を大きくし、其他砲火指揮装置の新式化、

高射砲の増加、飛行機射出機の改造等、着々として新しい武装を施されつゝあります。以上の戦闘艦隊所屬艦の他に

戦艦「アリゾナ」 三二、四〇〇噸 一四吋砲二門 二二吋

同 「ペンシルバニア」 三二、四〇〇噸 一四吋砲二門 二二吋

同 「オクラホマ」 二七、五〇〇噸 一四吋砲二門 二〇・五吋

の三隻が、目下船渠に寝て改装中であります。戦闘艦隊は以上の戦艦を中心として、次のやうな補助部隊から形成せられて居ります。

E 水雷戦隊

「旗艦」巡洋艦「オマハ」 七、〇五〇噸 六吋砲二門 三四吋

驅逐艦三十九隻 水雷母艦二隻

F 航空戦隊

航空母艦「サラトガ」(旗艦) 三三、〇〇〇噸 八吋砲八門 三三吋

同 「レキシントン」 三三、〇〇〇噸 八吋砲八門 三三吋

同 「ラングレー」 一一、七〇〇噸 五吋砲四門 一五吋

水上飛行機運搬艦「アローストック」「ガネット」

この航空戦隊は、主力艦隊とともに、太平洋作戦の中心になる可きものであります。が、詳しいことは後の「空中戦争」篇で申し上げます。

G 潜水戦隊

「旗艦」潜水母艦「ホーランド」潜水母艦二隻 潜水艦十八隻

十八隻の中左の六隻は潜水巡洋艦であります。

V一 號 一、九六〇噸 水上速力二二哩

V二 號 一、九六〇噸 同 二二哩

V三 號 一、九六〇噸 同 二二哩

V四 號 二、七六九噸 同 一五哩

V五 號 二、八二二噸 同 一七哩

V六 號 二、八二二噸 同 一七哩

以上の戦闘艦隊は、一年の大部分、太平洋海面に遊弋して居るのであります。更に大西洋部隊として、偵察艦隊が編制せられて居ります。

三、偵察艦隊 Scouting Fleet

A 旗艦 A・ウイラード中將坐乗

戦艦「アーカンサス」 二六、〇〇〇噸 一二吋砲一二門 二〇、五哩

B 第二輕巡洋艦戰隊

巡洋艦「トレントン」 七、〇五〇噸 六吋砲一二門 三三哩

同 「マーブルヘッド」 七、〇五〇噸 六吋砲一二門 三三哩

同 「リッチモンド」 七、〇五〇噸 六吋砲一二門 三四哩

同 「メンフィス」 七、〇五〇噸 六吋砲一二門 三三哩

C 第三輕巡洋艦戰隊

巡洋艦「デトロイト」 七、〇五〇噸 六吋砲一二門 三四哩

同 「ミルオーキー」 七、〇五〇噸 六吋砲一二門 三四哩

同 「ラレー」 七、〇五〇噸 六吋砲一二門 三四哩

D 第五輕巡洋艦戰隊

巡洋艦「ノーサンプトン」 一〇、〇〇〇噸 八吋砲九門 三三哩

同 「ソートレーキ・シチイ」 一〇、〇〇〇噸 八吋砲一〇門 三三哩

同 「ペンサコラ」 一〇、〇〇〇噸 八吋砲一〇門 三三哩

同 「チエスター」 一〇、〇〇〇噸 八吋砲九門 三三哩

偵察艦隊の戦略的任務は、戦争開始又はそれ以前に、急速にカリビアン海からパナマ運河を経て太平洋に現はれ、主力艦隊の前方にたつて、警戒搜索をやり乍ら、東洋進航の前衛となることとあります。それ故にこの艦隊には、速力の優俊といふことが、絶対條件になつて

居ります。(以上十一隻の巡洋艦は、次に出て居ります「コンカード」、戦闘艦隊の水雷戦隊旗艦「オマハ」「シンシナチ」(各七、〇五〇噸級)と亞細亞艦隊の「ヒューストン」(一〇、〇〇〇噸)ともに、米國の戦列巡洋艦の全部であります。)偵察艦隊には尙次のやうな補助戦隊が配属せられて居ります。

E 水雷戦隊

「旗艦」巡洋艦「コンカード」 七、〇五〇噸 六吋砲一二門、三三湮

水雷母艦二隻

驅逐艦三十五隻

F 航空戦隊

水上飛行機運搬艦「ライト」「チール」「サンドバイパー」

G 潜水戦隊

「旗艦」潜水母艦「カムデン」潜水母艦一隻 救難艦二隻 潜水艦二十一隻

更に太平洋岸には艦隊根據地部隊といふ補給特務戦隊が置かれて居ります。

四、艦隊根據地部隊 Fleet Base Force

A 第一特務船隊

掃海艇四隻 給糧艦一隻 給油艦一隻 航洋曳船一隻 工作艦一隻

B 第二特務船隊

掃海艇四隻 給糧艦一隻 給油艦一隻 航洋曳船三隻 工作艦一隻 病院船一隻

C 機雷戦隊

掃海艇二隻 敷設艇一隻

この他に拉典亞米利加の西海岸を巡邏する特務部隊や、沿岸警察部隊 Coastguard Service といふ大藏省管下の艇隊もありますが、それらは米國艦隊の編制から除外されて居ります。

五年後の新艦隊

この一九三一年度の米國艦隊が、直ちに日本攻撃の作戦行動を起すのでは無論ありません。米國海軍では、一九三五年（昭和十年）以後一九三八、九年（昭和十三、四年）頃を戦争の危険期と見て居ります。その頃は丁度支那の滿蒙鐵道政策が完成して、滿洲に於ける經濟戰は白熱状態にあるべく、米國の經濟的進出は著しく、又彼等の海軍がその弱點である巡洋艦隊の建造を終り、大航空隊を完備し去つた時であります。

その時に於ける米國艦隊の戦列部隊は、約そ次のやうなものでありませう。
主力艦は、改装の結果約十二連の速力で、航續力一萬二千海里乃至二萬海里に達し、日本近海に出動して燃料補給をやらすに、約一箇月間の作戦に耐えることが出来るのであります。（これは一九三一年度に於いてすでに實現せられます。）殊に彼等は速力十五海里程度の給油艦を多數持つて居りますから、海上補給も不可能ではありません。このやうに航續力が増大された

ればこそ、バイ大佐の作戦線前進の強行戦法が實現出来るのであります。

又「カリフォルニア」以下十一隻の十四吋主砲の仰角は、十五度から全部三十度以上に引上げられ、「メリーランド」級三隻の十六吋砲に至つては、三十度から四十度に上げられて、まるで高射砲のやうな恰好になりました。十六吋砲の射程は四萬碼我が「陸奥」「長門」の砲より五千碼遠く飛びます。十二吋砲艦「アーカンサス」は戦列から退くとしまして、一九三五年に於ける日米主力艦隊の砲力は左の通りになります。（日本の主力艦も「陸奥」「長門」以外の七艦は主砲仰角二十五度から三十度以上に増大されることと思ひます。）

米	國	一六吋砲	二四門	一四吋砲	一二四門
日	本	一六吋砲	一六門	一四吋砲	七二門

十六吋砲で六割六分強、十四吋砲で、五割八分強で、弾量や砲口威力等の計算を致しますと眞の砲力比率は六割も危ぶまない位であります。

巡洋艦では、次のやうな一萬噸級艦が、新たに星條旗を掲げます。

- 「ルイスビル」 一〇、〇〇〇噸 八吋砲九門 三三三三 三一年竣工
- 「シカゴ」 一〇、〇〇〇噸 八吋砲九門 三三三三 三一年竣工
- 「ビューストン」 一〇、〇〇〇噸 八吋砲九門 三三三三 三〇年竣工
- 「オーガスタ」 一〇、〇〇〇噸 八吋砲九門 三三三三 三二年竣工
- 「ニュー・オルレアンス」 一〇、〇〇〇噸 八吋砲九門 三三三三 三二年竣工
- 「ポートランド」 一〇、〇〇〇噸 八吋砲九門 三三三三 三二年竣工
- 「アストリア」 一〇、〇〇〇噸 八吋砲九門 三三三三 三三年竣工
- 「インディアナポリス」 一〇、〇〇〇噸 八吋砲九門 三三三三 三二年竣工
- 「ミネアポリス」 一〇、〇〇〇噸 八吋砲九門 三三三三 三三年竣工

以上が現に紐育、メリア島、ビューゼット・サウンド、費府の各海軍工廠、カムデン、ニューポート・ニユース、フォア・リバー等の各造船所で建造又は舾装されつゝある艦であります。この外に一九三五年度迄に二隻の一萬噸巡洋艦が建造せられますが、果してどのやう

な艦が造られますか、薄氣味の悪い疑問であります。

海軍の最高諮詢機關である將官會議 General Board は、一九三六年十二月三十一日迄に十六隻の八吋一萬噸巡洋艦と、六吋巡洋艦七萬二千噸を建造し終り更に八吋巡洋艦二萬噸、六吋巡洋艦一萬四千噸が造船臺上にあるやうにせねばならぬと上院へ申告して居ります。これが或程度迄實現することは確實でありますから、一九三五年（昭和十年）末には、十五隻の八吋巡洋艦と、五隻を下らぬ六吋新巡洋艦が現はれるものと思はねばなりません。そしてその艦型は如何なるものでありませうか。フロスト中佐は六吋巡洋艦の艦型を一萬噸級とし、四隻は砲十二門の純粹な巡洋艦、二隻は砲九門、艦載飛行機二十機を持つ航空巡洋艦にしなければならぬと主張し、プロクター大佐は「海軍協會雜誌」D.S.N.I.P. に、八吋砲九門、飛行機十二機を積む一萬噸艦の設計圖を發表して居ります。パーシバル大尉も「巡洋艦論」The Cruiser Problem に於て、三聯裝砲塔二基（八吋砲六門）を有し、速力二十八哩乃至三十哩の防勢力の強い巡洋艦型巡洋艦と、八吋砲九門乃至十二門、五吋砲九門乃至

十二門を積み二十一乃至五連の低速力の戦艦型巡洋艦の建造を警告的に強調して居ります。

一萬噸級の第一艦「ソート・レーキ・シチイ」の設計で、腕前の程を見せたD・テイラー少將等が、新八吋、及び新六吋砲艦の設計に何等かの新方式を見せることは疑ひありません。

これに對して我が名譽ある平賀造船中將の後輩たる造船技術者が、新艦艇建造計畫中の八千五百噸型六吋砲艦四隻をどう拵らへるか。我々としては、「加古」や「那智」に於て現はした、優秀無比な設計能力の再現を、切望せずには居られません。

とにかく一九三六年末に於いて、兩軍の巡洋艦は次のやうになるでござらませう。

一萬噸級八吋砲艦 米國十五又は六隻 日本八隻

七千百噸級八吋砲艦 米國〇 日本四隻

一萬噸八千五百噸級六吋砲艦 米國四又は八隻 日本四隻

この他に米國は「オマハ」級七、〇五〇噸六吋砲十二門艦十隻、日本は「川内」から「球磨」に至る五、一九五噸乃至五、一〇〇噸五、五吋砲七門級十四隻と驅逐艦級の小巡洋艦「夕

張」(二、八九〇噸五、五吋六)を持つて居ります。(別に三、二三〇噸級の「天龍」「龍田」があります、これは支那沿岸の作戦にでも使はれることと思ひます。)

驅逐艦に關しては將官會議は十二萬噸建造の申告をして居りますが、これは無論そのまま實現することはありません。たゞ總導驅逐艦六隻乃至九隻の建造だけは、急いでやるであらうと思ひます。フロスト中佐は、理想的艦型として二、一六六噸、五吋砲五門、水雷發射管十二基速力三十五哩の試案を出して居ります。日本は新建造計畫で一、四〇〇噸級十二隻を建造することになりました。

この他に「吹雪」級(一、七〇〇噸)二十四隻、「睦月」級(一、三一五噸)十二隻、「神風」級(一、二七〇噸)九隻等の大型新式驅逐艦(最舊艦「神風」が一九二二年十二月竣工、米國驅逐艦は「ベリー」級三隻を除くと、全部一九二一年以前の舊式艦であります)を持つ日本は、この艦種に關する限り、一九三六年に於いても、米國より優勢でありませう。

潜水艦に關しては、將官會議は最大限の三萬二千七百十噸の建造を提議して居り、フロ

スト中佐も千五百噸級七隻、八百噸級三十隻を建造する必要があると申して居ります。

マツクリーン少将は上院海軍委員会で、V級九隻(一八、五五〇噸)とS級の最後の艦三隻(二、五三五噸)の他に、二十三隻の千五百噸級艦を造らねばならぬと申して居ります。恐らくこの千五百噸級の艦が造られて、東洋海面に於ける攻撃的任務に服することになるであらうと思ひます。(日本潜水艦に關しては後で申上げます。)

以上が、戦争危険期に於ける、米國艦隊の中心勢力の豫想であります。この艦隊が作戦線を進め、西太平洋に進撃して来る時、その先鋒第一線に立つて、先づ最も威力を發揮するものは空中兵力であります。碧空に銀翼を輝し、蒼溟に爆音を轟かせる空の騎兵隊、航空機の一群を前衛として、彼等の戦陣は堂々と押し進められて来るのであります。

空中戦争

空軍の威力

空軍——航空兵力は、来る可き太平洋戦争の華形であります。

「ロンドン海軍條約」の成立によつて、太平洋に於ける兵形は大いに變化いたしました。即ち戰略的に見ますと、米國海軍の西太平洋作戦が著しく可能性を増し、戰術的には、航空兵力の活動範圍が大いに擴大されたのであります。何故米國海軍の西太平洋作戦がし易くなるかと申しますと、一九三五年(昭和十年)の日本海軍が、一九三〇年(昭和五年)の日本海軍に比べて、次のやうな不利な立場に立つからであります。

A、潜水艦七萬八千噸が、五萬二千七百噸に減つたために、敵主力艦隊を奇襲する機會が

非常に弱くなつた。これは劣勢艦隊たる日本軍にとつて非常な打撃であります。
 B、八吋巡洋艦は現在對米約百五十%の勢力を持つて、我が海軍の強味であるが、三十五年には六十六%程度に下つて、却つて弱點となる。これは大いに前哨戦に影響いたします。

これに反して一九三五年の米國海軍は、次のやうな有利な地位に立つてあります。

A、八吋巡洋艦の不足が充されるとともに巡洋艦噸數の二十五%に飛行機着甲板を装置出来ることになつたから、渡洋航空兵力が非常に多くなる。

B、日本潜水艦の減少によつて、戦艦の危険率が低下するとともに、飛行機搭載艦の行動が自由になる。何となれば、日本潜水艦が作戦區域の水面下に居れば、航空母艦、巡洋艦の飛行機搭載艦等は、絶えず水中から雷撃される不安を感じながら行動しなければなりません。故に日本の潜水艦が減れば減る程、米艦の安全度は増す譯であります。

以上の判定には、米國の作戦部でも、日本の軍令部でも、何等の異議はないと信じます。

右のやうな情勢になりました結果、太平洋作戦に於いては、攻防兩軍とも、航空兵力を従來より一層重要視しなければならなくなつたのであります。——米國は海上部隊の優勢を一層効果あらしめる爲めに。——日本は海上の不利を空中に於いて奪ひ回さんが爲めに。

露骨極まる對日作戦意圖をさらけ出しました、一九三〇年五月の上院海軍委員會の記録

Hearings before the Committee on Naval Affairs U.S.S. 1930 には、次のやうなプラット

大將の言葉が記録されて居ります。

「米國は戦場に於いて、潜水艦を以て攻撃すべき目標を殆んど持つて居ない。しかも日本潜水艦の奇襲攻撃に暴露すべき多數の軍艦を持つて居るのである。故に出来る限り、戦場に存在する敵潜水艦を少なくすることが、米國海軍にとつて有利なのだ。且つ敵潜水艦に對する警戒が不必要となればなるだけ、我軍は航空機を活用して、優勢艦隊の實力を發揮することが出来るであらう。」

更に同記録の中には、米國空軍の母ともいふべき、航空局長モフエツト少將(ロンドン

會議専門委員)が、かう申して居ります。

「ロンドン海軍條約の結果、我が海軍は巡洋艦噸數の二十五%に飛行甲板 Landing platform を装置出来ることになつたのである。飛行甲板は遙かに現用の飛行機射出機より優つて居る。これによつて我が海軍の航空戦術は、更に一新生面を開くに違ひない。」

モフエツト少將が何故こんなに、飛行甲板のことを重大さうに云ふかと申しますと、太平洋作戦に於いては、米國空軍の主力は、艦載飛行機に限られて居るからであります。

航空機は恐ろしい兵器であります。然し乍ら今日の航空戦術は發達の過程にあり、航空機の行動半徑も多くは五百哩を出て居りません。それでありますから、米國が日本に對して作戦する場合、比律賓の航空隊が臺灣を攻撃すること以外には、陸上根據地からの直接作戦は絶望であります。彼等は日本を空襲するためにはどうしても海上部隊とともに、その飛行根據地を移動しなければなりません。即ち航空母艦及び航空機を搭載する軍艦を、日本の近海に進出させねばならないのであります。故に米國が日本攻撃に使用出来る航空兵力は、艦隊

附部隊を中心として、他に陸上機の一部が比律賓又は南支那の或地點を根據地として、支作戦を行ふのであります。

この原則は、尠なくとも今後十數年に亘つて變ることはないでありませう。そしてこの事實は、太平洋戦争に於ける空軍の地位は、非常に重要な決定的要素であるが、一部の人が速断するやうな、海上部隊を無視出来るやうな獨立的存在ではないことを、語るものであります。

米國の空軍政策

一九二八年の「米國海軍政策」USNRPは、飛行機の建造維持方針に就いて次のやうに示して居ります。

「海軍航空隊の目的は、海上で艦隊とともに行動することである。故に飛行機の研究は、軍艦から行動することが出来る次の二種類を主眼とする。

A、戦闘、観測、戦術的偵察及び急降下機用の軽飛行機。

B、雷撃、重爆撃及び遠距離偵察用の重飛行機。

そして、なるべく一機が多くの能力を兼備するやうにしなければならぬ。」

これは要するに、太平洋作戦に最も適應した航空機の研究を、力説したものに他なりません。かくて米國海軍の航空政策は、どこまでも海上部隊中心主義であります。そして有名な五箇年一千機計畫は、その政策の具體的表現でありました。

この計畫は、ワシントン會議の後、萬年航空局長の異名を持つモフエツト少將が立案したもので、一九二六年（大正十五年）に法律として制定せられる迄には、非常な紆餘曲折があつたのであります。空軍の熱狂的信者である當時の陸軍航空次長ミツチエル少將が、猛烈な陸海軍無力論、空軍獨立論を振り廻したために専門家の間に非常な論戦が行はれました。その結果米國の航空政策を根本的に審議する使命を持つたモロー委員會が生れ、色々研究の末、空軍獨立論は葬られて、現在の組織たる陸海軍航空分立主義が確立されたのであります。

す。

かくてモフエツト少將案（五箇年一千二百四十八機計畫）を改修した、五箇年一千機計畫は生れました。この計畫の完成期は一九三二年（昭和七年）六月三十日で、その日に於ける米國海軍航空隊は、次のやうな堂々たる大勢力であります。

戦闘機	一三六機
偵察機	一四八機
雷爆撃機	三七八機
哨戒機	一三二機
練習機	一〇六機
計一、〇〇〇機	

然し航空機の機齡は短かい。計畫の進行中に、後から後から廢機が出て來ます。故に一九三二年の六月に、右の機數を揃へる爲めには、一九二六年以後一千六百十四機を製作しなけ

ればなりません。その経費豫算は八千五百七萬八千七百五十弗であります。一九三〇年末の常備機数は九百三十九機。最早殆んど完成に近いのであります。(因みに陸軍航空團は一九三一年七月一日に於いて、一千八百機を揃へる豫定であります。)

米國海軍はこの一千機を次のやうに配置して居ります。

海上部隊 五二二機

海外根據地

運河地帯 九三機

布哇パール港 一一一機

不明 四機

海兵遠征隊

東海岸クワンチコ 四八機

西海岸サン・チアゴ 二二二機

太平洋ガム 一四機

教育根據地 一六八機

特別任務 二八機

この全太平洋の波に翼の影を投じる大飛行機群が、戦時如何なる行動に出るかを豫想する前に、先づ米國海軍省が發表した「海軍省令第三百三十二號」General Order 132を一瞥しようと思ひます。この文書は、陸海軍航空部の任務分擔を定めた點で、注意する必要があります。

この「オーダー」によると、米國陸軍機の任務は左のやうなものであります。

A、陸上根據地から出發して、移動軍の一兵種として行動する。

B、敵航空機の米國本土に對する攻撃を警備する。

D、獨力又は陸軍の他兵種、又は海軍と協同して、米國の沿岸を砲撃し、又は米國に對して上陸作戦を執り、又は米國港灣附近で機雷敷設、通商破壊等を行はうとする敵の艦船を砲撃する。

以上、陸軍機の任務はAを除いては防禦的であります。Aは陸軍の遠征に伴ふ攻勢作戦を意味するものでありますが、日米戦争の場合、米國陸軍が大移動作戦をやるといふことは、殆んど考へられませんが、日米戦争に於ける米國陸軍の任務は、比律賓の防備戦を除いては、本國及び海外根據地の警備に止まります。少數の士官が支那陸軍の中へ入つて行くことは豫想されますが、大部隊の太平洋輸送などは、絶対にあり得べからざることです。米國の戦争目的は、滿洲に於ける日本勢力の驅逐、軍事的に云へば滿洲に於ける日本陸軍の戦闘能力を奪ふこととありますが、その目的は陸軍の大作戦がなくても達することが出来るのであります。海上交通線で生きて居る滿洲の日本陸軍は、その海軍をやられて仕舞へば忽ち最悪の狀態に陥らなければなりません。それですから、米國は全戦闘力を集中して、日本海軍を撃破し去りさへすれば、作戦の目的は達するのであります。何も數億の大金を投じて、支那大陸で移動作戦をやる必要はありません。故に日本軍と戦闘を交へる米國陸軍機は、比律賓部隊と支那の航空隊に對する幾らかの援助部隊及び布哇部隊に限られるのでありませう。要するに

彼等の任務は第二義的、防禦的であります。

これに反して同「オーダー」に示された海軍機の任務は、次のやうに、甚だ攻撃的な、アトラクティブなものであります。

- A、移動水上根據地 Mobile Floating bases (即ち航空母艦其他の軍艦) 又は陸上海軍航空隊から出發して、艦隊の一兵種として行動する。
 - B、大洋に於ける索敵任務に従ふ。
 - C、單獨又は海上部隊と協同して敵の陸上根據地、工場等を攻撃する。
 - D、米國の海上交通線を保護する。その保護方法は、沿岸海面の偵察及び哨戒、商船護送又は通商破壊を行ふ敵の潜水艦、航空機、水上艦船に對する攻撃等である。
 - E、陸軍と協同して米國の沿岸を砲撃する敵艦船を攻撃する。
- 右の五任務の中、A、B、Cは攻撃的任務、B、Dは防禦的任務であります。防禦的任務に於いては、海軍航空隊は陸軍の指揮下に置かれます。米本國の防空に關する限り、陸軍

指揮官が絶對的優越權を持つて居るのであります。たゞ布哇とパナマ運河地帯だけは、海外根據地として、海軍の航空隊長が防空指揮をとりまします。

これは日本でも略々同様でありまして、我が本土の防空に關しては陸軍機が重大責任を負ひ、海軍機は軍港、要港の空を守るに止めて居ります。

この他に、米國では海軍に屬する海兵機が特別任務を持つて居りまして「オーダー」にはE、前進根據地に關聯する作戦では、海兵機が陸軍機の任務を擔當する。

と、規定せられて居ります。比律賓戦争の場合には、布哇の海兵機P N型五十四機が、その絶大な航續力を發揮して、布哇からウェーキ島を中繼としてガムに飛び(三・四〇〇)哩)ガムから更にヤツプ島の北を掠めて比律賓まで千五百十哩の洋上飛行を敢行するでありませう。彼等が陸軍機と協同して、南溟の空に作動するとすれば、日本軍の比律賓に對する陸海協同作戦は、非常な困難に逢著しなければなりません。

米軍の空中戦術

アナポリス海軍兵學校の教科書「海軍航空術」Naval aviation は、百五十頁に足らぬ小さい書物ですが、米國海軍の航空兵力に對する評價及び彼等の航空戦術を知る上に於いて、見逃すことの出来ないものであります。これによりますと、米國海軍はミツチエル大佐(舊少將)のやうな、小兒病的空軍萬能論にも囚はれず、又一部保守主義者の航空兵力輕視論をも黙殺して居ることが分ります。彼等は航空兵力を、海軍力を構成する重大要素中の一つとして、評價して居るのであります。同書は曰く、

「航空機はその性能上、大洋に於いて獨立的に作戦することが出来ない。しかし今日以後の海戦では、この兵種が勝敗の決定要素であることは疑ひないのである。故に海軍航空隊は海上部隊と密接な協同動作をとつて、以つて完全な海上權を確保しなければならぬ。」

「完全な海上權」とは、空中管制を含む海上管制權力といふ意味であります。即ち米國海

軍航空隊の任務は、味方の海上管制を完全ならしめるために、空中管制を行ふことである。そして空中管制は實力を以つて遂行しなければなりません。即ち敵軍を撃滅しなければなりません。故に米國航空隊の第一任務は空中攻撃であります。そして Aviation は空中攻撃の方法を左の五つに分けて居ります。

- A、敵艦に對する爆弾攻撃
- B、同輕爆彈攻撃
- C、機銃攻撃
- D、地雷攻撃
- E、敵機に對する攻撃

この中で、空中管制のために最も必要なのは、第五の敵機に對する攻撃であります。

しかしそれを語る前に、航空隊の重要な副任務、「索敵」と「彈着觀測」について少しお話ししたいと思います。

「索敵」とは文字通り、敵状搜索であります。日米兩艦隊の戦闘は、先づ索敵方法の優劣争ひから始まります。五分間でも早く敵の所在を知つた方が、戦形を自軍に有利に導く機會が多いのでありますから、兩軍とも巡洋艦や潜水艦を前線遠く派遣して、無線の火花が太平洋上に青白く散り亂れるであります。この索敵行動に於いて、偵察機が如何に役立つかは論ずるまでもありません。彼等は敵艦の煙突の火を目當に、夜間偵察をもやる事が出来るのであります。(たとへば荒天の時だけは、遺憾ながら翼を艦上に休めて居なければなりません。)更に歐州戦までの海戦に於ける索敵行動は、主力艦隊が遭遇すれば終つたのであります。今日ではさうではありません。今や主力艦の砲戦は、少なくとも二萬五千米以上の距離を置いて行はれるのでありますから、敵艦隊と接觸を續けて行くことは容易ではありません。殊に煙幕を張つて艦體を蔽蔽するのが、劣勢軍の手でありますから、砲戦中に目標敵艦を見失ふことがよくあるのであります。この時に當つて水平線の彼方に、煙幕に隠れた敵艦隊を發見し、本隊に向つて刻々にその所在を通報するものは、空のパトロールたる偵察機隊であ

ります。

砲火観測の任務に至つては更に重大であります。三萬米内外の遠距離をもつて開始される今日の砲戦では、最も苦心しなければならぬのは弾着の観測であります。射撃艦の艦へ上つて、敵艦の艦の先がやうやく水平線に見えるやうな距離では、發射強がどこへ當り、どこへ落ちたか死んど分りません。戦艦が鐵塔のやうな、高い三脚艦や檣型艦を持つて居るのは、この遠距離砲戦の指揮をとるために、視界を擴めなければならぬからであります。しかし航空機が空中観測をやれば、この悩みは直ちに消滅して、砲の命中率はぐんぐん上つて來る譯であります。

以上は航空機の副任務であります。更に Aviation に據つてその攻撃的任務を考察して見ませう。

米國航空隊の空中攻撃は、爆弾攻撃を中心として行はれます。爆撃の威力は、海戦に於いて果してどの程度迄發揮せられるものであらうか。これに就いては今尙異説紛々たるものが

あります。

熱狂的空軍論者ミツチエル大佐は、その名著「空中國防」Winged Defense に於て、盛んに爆撃の威力を高調して、獨逸から捕獲した戦艦「オストフリーランド」や、米國の舊式戦艦「アラバマ」等の爆撃實況を詳しく書いて居ります。「オストフリーランド」は二萬二千、四百四十噸のやゝ舊式な弩級艦でありまして、一九二二年の夏、大西洋岸ヴァヂニアの沖で沈められました。この爆撃は七月二十日と二十一日の、二日ばかりでやつたのであります。二十八機の陸軍機が、六十三箇の爆弾を投げたのであります。一九二三年、ミツチエル大佐は更に自ら指揮をとつて、二十八機のマルチン爆撃機を率ゐ、ノース・カロリナ州ハツチラス島沖で、一萬六千噸型の舊式戦艦「ニューチャーヂー」「ヴァヂニア」の二艦を爆沈いたしました。しかし乍ら、以上は皆、一定の海面に固着した無抵抗の舊式軍艦でありますからこれを以て直ちに海上艦無用の結論に到達するのは、些か速すぎます。一九二四年の秋に行はれた廢棄戦艦「ワシントン」(三三・六〇〇噸)の爆撃は、一千五百封度の爆弾でやりまし

たが、遂に失敗に終りました。日本海軍が廢棄戦艦「土佐」(三九・九〇〇噸)に對してやりました空中爆撃も、先づ同じやうな結果であつたと思ひます。二十浬以上の速度でZ型のチグザグ航進をやり、しかも高角砲をふり立て、居る軍艦に對して、果して空中爆撃がどれだけの威力を見せるか、殊に空模様の險惡な日にはどうするのであるか。——そんな疑問はまだくゞ引きこまず譯には参りません。

たゞ恐ろしいのは、空中爆撃の未來性に富む點であります。殊に米國の空軍は、世界第一の科學戰研究所たる陸軍化學戰部製作の瓦斯彈を使用出来る強味があります。

ミツチエル大佐に云はせると、先づ快速機を利用して敵の上空から毒瓦斯彈を投下し、更に煙幕を張つて敵艦隊を包み、その上で爆撃隊を送つて空中攻撃の威力を發揮すれば敵の水上部隊は防禦の方法がないではないかと云ふのであります。これに對しては専門的な反駁もありまして、ミツチエル大佐の云ふやうな風には、うまく行かないと思ひます。しかし空中攻撃を受けた軍艦が、非常な悲惨な狀況に陥るであらうことは疑ふ餘地がありません

二十五封度の催淚瓦斯彈を投下すれば、機關室の奥に居る者まで涙を出します。又、最高熱發射器テルミットを投げられますと、どうしても甲板の火災は免れません。(米國海軍では甲板の高熱を防ぐために戦時には石棉製の靴を使用することになつて居ります。)殊に戦慄すべきものは夜間の襲撃であります。夜間の軍艦は、どんなに燈火管制をやつて、光の洩れるのを防ぎましても、煙突の火が目印になつて、爆撃機に狙はれ易いのであります。これは一九三〇年の初夏、我が飯田第二艦隊が、南洋に於ける演習で痛感した筈であります。

要するに爆撃の威力は、まだ戦艦の砲撃には遠く及びませんが、五六年後の一九三五、六年頃になりますと、海上決戦の重大要素となるに違ひありません。米國海軍は早くも「ロンドン條約」の結果廢棄艦となつた弩級戦艦「フロリダ」「ユター」に對して、一萬五千呎の高度から四千封度の爆弾を投下する、大爆撃實驗計畫を發表いたしました。

敵艦に對する空中攻撃の一方として更に雷撃があります。この雷撃、即ち航空機の魚雷發射は爆撃以上の脅威であるとともに、爆撃より以上にその實戰的効果も疑はれて居ります

爆撃は三千米位の高度からでも十分やれますが、雷撃の場合は必ず低空飛行をしなければなりません。ダイビング、急降下発射といふのが雷撃機の攻撃法であります。即ち或る程度の高度を保ちながら敵艦に追跡し、一二千メートルの距離に達した時、機首を下げて急速降下をやり水上三四十呎の低空で魚雷を發射して、再び機首を立て直すのであります。この魚雷は小さくても重量千五百封度以上ありますから、雷撃機の行動は勢ひ鈍重であります。どうしても俊速な戦闘機隊で護衛しなければ、敵駆逐機の襲撃を防ぐことが出来ません。我國では一九三〇年の夏、廢棄小巡洋艦「明石」がこの雷撃で沈められました。

しかし、以上の爆撃も雷撃も又砲火觀測も、戦場の空中管制を行ふ力があつてこそ、始めて完全に遂行出来るのであります。空中管制とは、戦場の空に敵航空隊の存在を許さないこととであります。故に先づ戦闘機の大部分を以つて、敵航空隊を殲滅することが何よりの急務となつて來ます。

戦闘機隊は、先づ戦闘の火蓋を切り、且つ兩軍の交戦中絶えず空中を疾走して敵機を襲撃し、以つて味方の爆、雷撃機及び海上部隊の活動を擁護しなければならぬ任務を持つて居ります。機銃の先から火を吐きながら、高等飛行の限りを盡して、爆音高く空中に亂舞する彼等こそ、新しい騎兵、空中戦争の華形であります。

Naval Aviation が示す以上の要務令、又議會の Hearings 海軍協會の Proceedings 等を綜合して考へますと、日本主力決戦の時に於ける米國航空隊の戦闘方法は、ほど次のやうなものであります。

- A、米國艦隊附の航空隊は優秀機を揃へ、日本軍に對して常に少なくとも五十哩以上の行動半徑の優越を保ち、徹底的に攻勢に出る。即ち、行動半徑の短かい日本の戦闘機隊が、まだ飛び出すことの出来ないうちに、彼等は飛び出すのであります。
- B、戦闘に當つては優秀な昇騰力を利用して、終始日本軍の上にあるやうにし、空中戦争に於ける最も有利な隊形をとる。
- C、かくて立ち退けた日本の戦闘機隊を猛襲して、機銃の齊射を浴せかけ、海上部隊が三

萬米の砲戰距離に入るまでに、全力を盡して制空權を握らなければならぬ。

D、それ以後は、空中管制をやりながら、砲火觀測を行つて、戰艦隊の砲戰を有利に指導する。

E、それとともに雷、爆撃機は日本艦隊を襲撃して、爆弾と瓦斯彈と魚雷の總攻撃を敢行する。

以上の想定が實現して、日本の戰艦隊が若し彼等にやられたとしましたならば、その時の日本艦隊ほど憐れむ可きものはありません。

航空隊を失つた艦隊は盲の艦隊であります。十六吋の巨砲も、百鍊の砲術も、如何とも施すことが出来ません。戰艦隊がやられた後の艦隊は、最早命中率の低い高角砲をふりまはすより他には、敵の空中攻撃を防ぐ手段がないのであります。

故に日米兩艦隊が遭遇戰をやります時に、最初の空中戰に負けたら、その艦隊は最後まで敗勢に置かれるものと思はねばなりません。

こゝに航空兵力が、海戰の決定的要素たる、所以があるのであります。それでありませうか、若し日本の戰艦隊が、最初の一戰で米國航空隊を壓し去りましたならば、形勢は逆轉して米國艦隊が却つて非常な苦戰となるのであります。

近代海戰は最早單純な砲戰ではありません。米國海軍がその數字的優勢を眞の優勢たらしめるも、日本艦隊がその數字的劣勢を劣勢たらしめないのも、ともに空中戰の勝敗に影響されるものが非常に大きいのであります。

東京空襲は牽制作戰

以上は主力決戰の場合に於ける空中戰の想定であります。この外に米軍は、主力の決戰前に航空母艦又は飛行機を搭載した巡洋艦を我が近海に出動させて、東京其他の工業地帯に對する空襲を執行するであります。又、布哇からガムと比律賓に分遣されるPN型爆撃機が、任務遂行の後、日本に着陸して捕虜となるだけの決心を持つてやつて來れば、航續距離

二千渾以上の同機は、千三百六十渾のガムから東京を、千三百二十渾の比律賓マニラから北九州を、空襲することは十分可能であります。これ等の航空隊が我が都市を空襲しましたならば、どうしても相當酷い損害は免れません。勿論我が近海には航空監視隊が絶えず空中偵察を続け、敵航空母艦、敵襲撃隊の發見に血眼になるであります。そして、敵軍の目標を東京とすれば、霞ヶ浦、横須賀、所澤、立川等の各航空隊が敵襲撃隊に對して猛撃を加へ多數の米國機は、黒煙を流しながら射落されるであります。しかし乍ら、若し三機でも四機でも防空線を突破して、東京の上空に出ることが出来ましたならば、我々は爆弾と瓦斯弾と焼夷弾が、氣味の悪い金屬性の音を立てながら、頭上に落下して來るのを聞かなければなりません。殊に今後米國海軍にドルニエ、DOXのやうな六千馬力以上もある大飛行艇が出來て、十分機銃で武装してやつて來ましたならば、たとへガム、比律賓が我軍に占領されたとしても、ウエーキ、ミツドウエイ等の諸島又は北方アリューシャン群島のキスカ邊りから飛び出すことが出來ます。日本人の受ける精神的打撃は、それこそ非常なものでありませう。

しかし乍ら、我が主力艦隊が海上にあつて、倏然として Fleet in being の威力を見せて居る以上、米國航空隊の空襲は、日本の工業的生命を奪ふほどのものではないと斷言出來ます。何となれば、ウエーキ、ミツドウエイ、キスカの諸島から飛んで來られるのは、少數の爆撃機だけであり、比律賓、ガムから來るのも同様、行動の鈍重な大型機に限られて居りまして、我が防空戦闘機隊の攻撃を防ぐ可き護衛部隊は連れて來られないのであります。更にガムは開戦とともに日本巡洋艦隊の攻撃と空襲で破壊されて仕舞ふことが豫想されますし、比律賓部隊も、マニラ攻防戦の方に全力を傾倒しなければならなくなるのであります。又航空母艦部隊の空襲も、主力の決戦以前に、全力をこぞつて敢行することは、米國軍として非常な冒険であります。主力の決戦までは、一機でも二機でも、むざ／＼と捨てることは出來ません。まして航空母艦「サラトガ」「レキシントン」の二百機を、日本の防空線内に送つて、死地に投じ去ることは、いかに猪突蟹勇の司令官でも、三考四考せずには居られないと

思ひます。彼等が全滅を豫期して東京を空襲し、かりに大正十二年九月一日の震災の慘狀に近い打撃を加へて見ましたところで、日本防空隊との戦闘で、全滅に近い憂目を見なければなりません。そして主力の決戦に當つては、米軍は約二百機の航空兵力の不足を來す譯であります。

故に主力戦が終るまでは、米軍の日本空襲は第二義的な支作戦に止まるべきであります。日本軍も巡洋戦艦又は八吋巡洋艦の護衛の下に、航空母艦を支作戦に使用するでありません。しかも結局、兩軍航空隊の第一任務、航空作戦の最大ポイントは、主力決戦の時に於ける戰場制空權の争奪であります。

さて對日作戦に使用出来る米國航空隊は、艦隊航空隊に限られて居ることは、前に申しました。そして艦隊航空隊の中心は航空母艦であります。現在では、航空戦隊を編制して居る次の三隻が、彼等の有する航空母艦 Aircraft Carriers の全部であります。

- サラトガ 三三・〇〇〇噸 八吋砲八門 三三湮 八三機搭載
- レキシントン 三三・〇〇〇噸 八吋砲八門 三三湮 七四機搭載
- ラングレー 一二・七〇〇噸 五吋砲四門 一五湮 四八機搭載

航空母艦は海上の移動根據地であります。戦闘に疲れた航空機は、この飛行甲板に下りて翼を休め、爆弾、燃料等の補給を受けて、更に第二次第三次の戦闘任務に服するのであります。そしてこの點に於いては、「サラトガ」「レキシントン」は理想的な艦であります。彼等は一九二九年の秋、加州のサン・チアゴから布哇のパール灣まで二千二百湮の東太平洋を、一時間三十湮七の平均速度で横斷したことがあります。

一艦で年に約五百萬圓の維持費が要ります爲めに、大き過ぎるといふ悪口もありますが、海上根據地としては正しく世界第一であります。これ以外に、「アローストック」「ガネット」「イト」「チール」「サンドパイパー」といふ水上機運搬艦 Aircraft Tender があつて、約六十機の水上機を載せて居りますが、これらは我が特務艦「能登呂」のやうに貨物船を改装

した、飛行甲板のない艦でありまして、デリックで水上機を波の上へ吊り下して飛ばすのであります。

又、第一線艦隊に属する主力艦、巡洋艦は、全部艦載機を持つて居りますから、今日米國艦隊に属する航空機は、實に五百十二といふ驚く可き數に達して居ります。これに海外遠征隊たる海兵機を加へますと、約六百機に近い龐大な大航空隊であります。

これに對する日本海軍航空隊の現状は甚だ暗黒的であります。陸上部隊としては霞ヶ浦七隊、横須賀五隊、佐世保二隊半、大村二隊半計十七隊でありまして、その常備機數 Destroyer Planes は百三十六機に過ぎません。しかもこの少數の陸上機は、戦時に於いては軍港の防空任務と、戦闘員の訓練とに勢力の大半を取られて、戦列に出る數は極めて少なくなるのであります。

更に海上部隊の實狀は一層貧弱であります。航空母艦は、

「赤城」 二六・九〇〇噸 八吋砲十門 二八・五漚

「加賀」 二六・九〇〇噸 八吋砲十門 二三漚

「鳳翔」 七・四七〇噸 五・五吋砲四門 二五漚

の三隻を持つて、米國に負けないやうであります。その常備機數は僅かに三十九機といふ有様であります。航空母艦以外の軍艦が搭載する機數は三十二。海上奇隊の全兵力を合せて漸く七十一機。まさに米軍の一分二割であります。陸上部隊の參戰を豫想しても、この現狀では空中戦の勝利は絶望に近いといふより他ありません。

三航空母艦は約百二十五機を搭載する能力を持つて居りますから、現狀より約八十六機多くなり、戦艦以下の艦載機も約二十機増備して五十機とし、更に陸上部隊中から六隊約四十機が戦闘に加はるとしましても、我が海上航空兵力は、二百機を僅かに超えるに過ぎないのであります。しかも二大航空母艦には、重量の割合に搭載機數が少ないといふ缺點があります。これは英國の航空母艦「フューリアウス」の二重甲板に感心して、三重甲板を作つたからでありまして、その爲めに勢ひ一番上の着甲板が狭くなり、海上根據地としての能力

が低められるとともに、發艦の時も一枚甲板の艦よりは、却つて混雑をして居るのではなからうかと思はれます。

造船中將平賀博士が、一九二九年の萬國工業會議に發表された論文によりますと、甲板上に障碍物がなく、砲の配置も絶好であり、又動搖防止装置も完全で、非常に良い艦だといふことであります。私は博士の言葉に絶大の信用を拂ふとともに、「赤城」「加賀」の搭載機が、少なくとも各百機はあつて欲しいといふ、強烈な希望を止めることが出来ません。更に主力艦、巡洋艦の航空機射出器が、明らかに米國のものより劣つて居るのを見るのも、亦耐え難い遺憾であります。

しかも米國の航空機は、日本機に比べて性能が遙かに高いのであります。カーチス「C-1」二百馬力戦闘機、ボーイング「B-1」四百六十馬力戦闘機、チャンス・ポート「VO-111」二百十馬力偵察機、グレン・マルチン「TM-1」八百馬力爆撃機等の一九二九年機に對しても、一九三〇年の我が軍用機は、その威力が非常に劣つて居ります。「陸奥」を造り、「加古」を造

り、「伊號五十三」潜水艦を造つた我が造船技術家は、米國の造船技師より優秀だといふ位の誇りを持つて居りますが、飛行技師諸君に至つては、その自信力が甚だ薄弱であります。

我が海軍工廠が彼れの費府工廠を誘駕し、三菱航空機、川崎造船、中島飛行機、愛知時計電機、川西機械等の航空機製造會社が米國のペランカ、ボーイング、カーチス、グレン・マルチン、チャンスポート工場等に對して技術的優越を誇ることが出来るのは、果して何時の日でありませうか。軍艦製造に於いて示した優秀な科學的能力を、航空機製作の上に現はす可く、今や日本は技術的總動員を行はなければならぬ時であります。

時速三百五十キロの米軍戦闘機と、二百キロの日本戦闘機とが相闘ふ時、勝勢がどちらにあるかは云はずして明らかであります。三千米の高度へ四分で昇服する米國艦上戦闘機は、九分かかる日本機に對して、常に上空にあつて攻撃の姿勢をとることが出来るのであります。

近代の戦闘に於ける精神力には限度があります。精神力が勝敗を決定するのは、略々同程

度の機械力を持つ軍隊が交戦する時に限ります。(但し、極く局部の戦闘には異例があります。)ポロ軍艦、ポロ航空機をもつて近代的戦争をすることは出来ません。換言いたしますと科學的能力の低度な國家、民族は、到底深刻な現代戦争に耐えることが出来ないものであります。私は祕かに、日本の航空技術界に、一大天才が出現することを期待するとともに、全技術家が各面に於いて、そのレベルを高める爲めに、異常な努力を發揮せられんことを、心から切望せずには居られないのであります。

天才的航空軍司令官の出現

昭和五年の十一月に決定した日本海軍の新航空兵力充實計畫は、一億二百十萬圓を以つて昭和十三年末(一九三八年)迄に陸上航空隊十四隊、百八十六機、艦上機八機、計百九十四機を新たに常備しようとするのであります。その中、陸上部隊の内容は左の通りであります。

戰 闘 機
爆 撃 機
大 型 飛 行 艇
中 型 飛 行 艇

一九三八年にこの計畫が完成しますと、現在の艦上部隊 機、陸上部隊一 機が

艦上部隊 機、陸上部隊 機となり、合せて 機、一九三一年度米國海軍

航空隊の、約三十八%であります。昭和十一年(一九三六年)には、その中、二隊半がまだ出来上つて居りません。

しかし、艦上部隊は建造中の新航空母艦「龍驤」(七・六〇〇噸)が就役し、且つ戰艦巡洋艦の改装によつて、艦載能力がすつと増大しますから、戦時には約二百五十機を積むことは出来ると思はれます。これに海上戦闘に参加出来る陸上機を百八十機前後と見て、約四百五十機足らずの参戦勢力を形成する譯であります。丁度一九三一年の米國艦隊航空兵力に匹敵

します。

しかし乍ら、一九三六年の米國海軍航空隊は、最早今日の彼等でないことを知らねばなりません。現在の常備一千機以外に、次のやうな新兵力の増加が、豫想せられるのであります。

A、新一萬噸八吋砲大巡洋艦十五隻の搭載機が約百機あります。

B、一萬三千八百噸型航空母艦一隻乃至三隻の建造が豫想せられ、この搭載機数は八十機乃至二百六十機であります。

C、六吋砲航空巡洋艦の建造を四隻と見て、これが又約八十機であります。

D、亞細亞艦隊附部隊及び比律賓陸上部隊の擴張が豫期される。これは二十機乃至五十機に止まるであらうと思はれます。

例のモフエツト少将は、早くも將官會議 General Board に對して、六吋航空巡洋艦八隻(各二十機搭載)の建造をアドヴァイスして「これは最も有力な通商破壊艦である。」と

豪語して居ります。

以上の新艦載機及び海外部隊が現はれるといたしますと、一九三六年末(昭和十一年)に米國艦隊が、西太平洋作戦に使用出来る機数は、實に八百五十機乃至一千機内外といふ恐ろしい數字になるのであります。しかし、米國海軍はまだこの豫算を取つて居りません。ことに於いて將官會議が立案した新一千機計畫 New thousand useful planes programme (建造費八千五百萬弗)が生れて來たのであります。この好戰的計畫は、恐らく多くの反對論者から、非難の雨を注がれるであります。大統領も必ず擧げざるに違ひありません。しかし乍ら、この新しい一千機の空軍は、米國がその經濟的帝國主義を遂行する上に於いて、缺くことの出來ぬ前衛部隊であります。必ず最後に何等かの形を以つて、實現されるに違ひありません。過去に於いても米國の軍事計畫は、常に提案、反對、成立の三段階を辿つて居るのであります。

かくて、一千機内外の大航空隊が、西太平洋作戦に使用されることとなつた時には、日本

の戦略的地位はすつと低くなります。海上に於いては艦隊の致命的劣勢。空中に於いては一千機對四百機の戦闘。この兵形で國防線を死守するといふには、日本海軍は人間能力の最高限を發揮しなければなりません。

平板な定石的な守勢作戰をとつて居つたのでは、空中戦、海上戦ともに敗勢に陥ることは目に見えて居ります。この上は巡洋艦の活用、戦艦の任務擴大、大巡洋艦の戦略的使用法その他輕巡洋艦、大型驅逐艦の新戦法等を集中的に研究して、兵術の差分野を開拓し、一方潜水艦戰の威力をいよく發揮させて、終始冒險的作戰に出るのが、日本海軍に許された唯一の戦争方法であります。

空中戦に於いても、日本軍はどこまでも冒險的に出ることが必要であります。海軍航空隊は、海上部隊とともに、全力をあげて敵航空母艦を狙はねばなりません。先づ敵の海上根據地を破壊することが、日本空軍の第一任務であります。我が航空母艦も亦敵機の攻撃目標となるであります。しかし日本軍は航空母艦を破壊されても、尙陸上根據地を持つて居りま

す。東京を繞る霞ヶ浦、館山、横須賀はもとより、

マーンヤル

郡島

島、東カロリン郡島

島等、北緯四十度から赤道直下の海面へかけて

絶好の郡行基地が點々として連つて居ります。これは悉く陸上機又は水上機の巢となること
が出来るのでありますから、戦時には皆、高角砲、機關銃等をもつて武装されるであらうと
思ひます。故に兩軍の航空母艦が共に飛行甲板を破壊された場合は、戦況は日本にとつて有
利であります。こゝに日本航空隊の乗す可き、米軍の弱點があるのではなからうかと思
はれます。

我が航空隊がこの弱點を衝いて、敵航空母艦の爆撃に成功すれば、二十世紀の無敵艦隊た
る米國艦隊も、或は降旗を掲げなければならぬやうな、ことになるかも知れません。反對
に若し又彼等が交戦中その航空母艦を守り通すことが出来ましたならば、その時の日本艦隊
の運命は、最も悲劇的なものであります。

尙、米國軍の參戰機が、果して一千機内外に止まるかどうか疑問であります。何となれ

ば獨逸大西洋新路の新定期船「ブレイメン」や「オイローバ」が、すぐに航空母艦に改装出来るやうになつて居ることを思ひますと、戦時に米國快速商船隊中の一部が、飛行甲板を張つて假裝航空母艦に變形することは十分豫想しなければなりません。現航空母艦「ラングレー」は商船を改装したものでありますが、相當の成績を上げて居ります。若し船舶院の巨船「レヴァイアザン」等が飛行甲板を拵らへますとすれば、直ちに立派な海上大飛行基地が出来上る譯であります。二十浬以上の速度を持つ假想航空母艦十數隻の出現は、約三百機の新鋭機の參戰を意味します。しかもこの飛行甲板張りの工事は、現在の造船術を以つてすれば、約一箇月内外で出来上るのであります。勿論日本もこれに對して、數隻の假裝航空母艦を拵らへるでありませう。然し乍ら、殆んど無限の操縦士を持つ彼等、(車隊以外に一萬三千人——一九三〇年)フォード一社だけでも日本の全航空會社より以上の製造能力を持つ彼等(一九二九年全米製造機數六千)は、太平洋中戰に於いて、出来る限り、その能力を發揮しようとするでありませう。かくて、日本の航空隊は、餘程偉大な天才的指揮官と、決死の冒險的戰闘を以てしなければ、太平洋上最初の敗戰を喫しなければならぬのであります。

プラット大將の新戦法

決戦を強制する米國艦隊

マハン大佐はその名著「海軍戦略」Naval Strategy に於いて、兵力集中主義が海戦の原理である、と云つて居ります。先に申しましたプラット大將の戦略も、パイ大佐の作戦線前進の戦法も、みなこの原理に則つたものであります。今や米國海軍の作戦研究の中心は、「如何にして主力艦隊を日本の近海まで押し進めて行くか」といふ點に置かれて居ります。彼等の太平洋戦に於ける作戦根據地が、桑港であり、前進根據地が布哇であることは、前に申しました。しかし乍ら新しい情報を綜合して考へますと、今日の米國海軍は、桑港からの直接作戦を企て、居る點もあるのではないかと思はれるのであります。

無論布哇は最も重要な補給基地且つ支作戦根據地であり、又比律賓も非常に重大な牽制作戦の基地であります。最早彼等の作戦の中心地ではないのであります。

南加州サン・ディアゴ港に集合した太平洋部隊（戦團艦隊）と大西洋部隊（偵察艦隊）は、その大航續力を利用して、開戦後直ちにガム島の北方海面に現はれるのであります。

途中水雷艦隊はどうしても布哇で燃料補給をやらねばなりません。送油管でどん／＼注ぎ込むのでありますから、その日数は大したものではあります。

かくて、ガム島の北に現はれた米國艦隊は、小笠原群島を占領して東京、大阪方面の工業地帯に對する空中攻撃を行ひ、日本の主力艦隊に向つて決戦を挑みかけるのであります。若しそれでも日本艦隊が出て來なければ、琉球列島を占領して南支那海の制海権を奪ひどうしても日本の主力艦隊が、一戦せねばならぬやうな情勢を拵らへるのであります。

以上は甚だ米國海軍が、自分を買ひ被り、日本海軍をあまりに見くびつた戦略のやうであります。冷靜に考へて見て、十分實現性のある戦法であります。何んとなれば、一九二五年

(大正十四年)に、クント大將がやつた太平洋渡洋大演習によつて、彼等はその艦隊航續力に或る自信を得たのであります。殊に近來主力艦の航續力は、二萬哩といふ恐ろしいものになつて居るのでありますから、彼等の作戦行動圏が擴大されたのは怪しむに足りません。そして米國海軍の行動圏が大きくなつたといふことは即ち太平洋が狭くなつたのであります。五年前の戦形と、今日の戦形は既に違つて居ります。十四隻の超弩級戦艦の改装が全部終つた五年後に於いて、彼等の渡洋力が大きくなるのは當然のことでありませう。

又、日本の主力艦隊が、米國艦隊を恐れて蟄伏するであらう等といふ想定は、随分人を見下げ果てた話しのやうであります。これとても兵學上から考へますと、少しも不思議ではありません。近代の大海戦では、砲力の劣つた艦隊が必ず敗戦して居ります。前著「太平洋戦争」で一吋申上ました通り、歐洲大戰を見ても、コロネル沖フォークランド沖の英獨海戦といひ、ヂエツトランド、ドツガー・パンクの大海戦といひ、波羅的海に於ける露獨海軍と云ひ、すべて悉く劣勢軍の敗北を以つて終つて居るのであります。日露戦争の黄海々戦、日露

戦争の日本海、黄海、蔚山沖の諸海戦も亦、我軍が優勢をもつて劣勢な敵軍を撃破したのであります。劣勢必敗を示すN二乗法の鐵則は、儼として歴史的事實の上に立つて居ります。獨逸の大海艦隊が、大戰中ウキルヘルムス・ファーヘンに蟄伏して、戦艦「フリードリツヒ・デル・グローセ」以下が鳴りを潜めて居りましたのも、何も彼等が卑怯であつたからではなく、勝敗の數が餘りに明らかに豫知出来たからであります。故に六割海軍である日本艦隊が戰略的守勢をとるのは、兵學上の消極的定石であります。若しも日本海軍が冒險的作戦をとつて彼等を遊撃して出ましたならば、優勢艦隊たる米國軍としては、牽制作戦の勢が省けるだけでありますからよろこんで應戦するでありませう。元來彼等は決戦を求めてやつて來るのでありますから、日本艦隊に逃げを打たれることが、一番の苦痛なのであります。故に若し日本艦隊が逃げた場合には、小笠原を占領し、琉球を侵略し、工業都市を空襲して、日本の生命的地帯、生命的交通線を脅かして、どうしても日本艦隊が誘ひ出されずには居られないやうな牽制作戦を取るのであります。日本艦隊が蟄伏して純然たる守勢をとつたとすれ